

Global Classrooms

グローバル・クラスルーム

報告書

高校模擬国連国際大会への第9回日本代表団派遣支援事業



2015年6月



グローバル・クラスルーム日本委員会

Japan Committee for Global Classrooms



公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

【後援】

外務省

経済産業省

文部科学省

公益財団法人日本国際連合協会

国際連合広報センター

【協賛】

株式会社エヌエフ回路設計ブロック



株式会社 エヌエフ回路設計ブロック

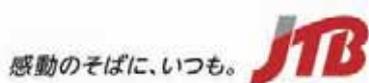
キックマン株式会社



TOEFL Junior® (GC&T)



株式会社ジェイティービー



損害保険ジャパン日本興亜株式会社

ちきゅうくらぶ



ちきゅうくらぶ

一般財団法人凸版印刷三幸会

TOPPAN

株式会社ナガセ

東進ハイスクール

学校法人河合塾

河合塾

株式会社公文教育研究会

KUMON

株式会社講談社

講談社

学校法人駿河台学園

駿台予備学校

学校法人 高宮学園 代々木ゼミナール



トヨタ自動車株式会社

TOYOTA

株式会社日能研

日能研

株式会社ニチレイ



株式会社 By-Q ホールディングス



株式会社みずほ銀行



三井物産株式会社



株式会社三菱東京 UFJ 銀行



日本光電工業株式会社



海外トップ大進学塾 Route H
(ベネッセコーポレーション)



株式会社三井住友銀行



三菱商事株式会社



(五十音順)

【協力】

株式会社日本経済新聞社

株式会社読売新聞グループ本社



理想科学株式会社



日本航空株式会社



株式会社リクルートマーケティング
パートナーズ



(五十音順)

目次

グローバル・クラスルームについて	2
日本模擬国連について	2
企画概要	3
派遣報告	4
受賞	8
参加者報告（アドバイザー）	9
参加者報告（派遣生）	16
支援者・支援団体一覧	42
ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）からのメッセージ	43
グローバル・クラスルーム日本委員会（2015年6月現在）	44
おわりに	45
関連リンク	46



■ グローバル・クラスルーム

グローバル・クラスルームは、国連会議のシミュレーション(模擬国連)を通じて、現代世界における様々な課題について学ぶための先進的な教育プログラムとして、公立中学校・高校を対象に、米国情連協会の提唱により始まりました。模擬国連に参加する生徒は、国連加盟国の大使として、国際問題を討議し、決議案を作成し、賛成者・反対者と交渉し、世界が直面する課題の解決に向けて、「国際協力」を実現していきます。

米国情連協会は、このグローバル・クラスルームを米国諸都市のみならず世界各地に普及させることで、国際理解教育と模擬国連の良さを多くの国の学校と共有するとともに、模擬国連コミュニティの裾野を広げようとしています。グローバル・クラスルームは、既に中国、インド、ドイツ、レバノン等で始まっています。

グローバル・クラスルーム日本委員会は2007年に組織され、同年の第1回日本代表団の国際大会への派遣を皮切りに高校生の模擬国連活動が始まりました。8回目の派遣となった2014年度の国際大会では最優秀賞を受賞しました。参加校の数は増加傾向にあり、グローバル・クラスルーム日本委員会はこれからも模擬国連活動の普及に努めてまいります。

■ 日本模擬国連

日本模擬国連(Japan Model United Nations: JMUN)は、日本で初めて組織化された模擬国連活動を行う団体です。1983年上智大学において、当時上智大学教授であった緒方貞子(元国連難民高等弁務官)顧問の下、発足した「模擬国連実行委員会」を前身としています。当初は毎年ニューヨークで開催されている「模擬国連会議全米大会」への日本代表団の派遣を中心に活動を行っていましたが、委員会の規模の拡大に伴い、日本国内における模擬国連の活動を本格化させ、2010年、名称を現在の「日本模擬国連」に改名しました。

日本模擬国連の目的は、「模擬国連」という活動を通じて、さまざまな国際問題についての理解を深めると共に、それらの問題の解決策を探り、国際社会に貢献できる人材を育成・輩出することです。また、国際政治や国際問題を体験的に学習する効果的な方法として「模擬国連」を日本において普及させる役割も担っています。



■ 企画概要

【企画名称】

2015 年度高校模擬国連国際大会への日本代表
団派遣支援事業

【主催】

グローバル・クラスルーム日本委員会、
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
(ACCU)

【日程】

2015 年 5 月 12 日 (火) ~ 18 日 (月)

【開催場所】

米国ニューヨーク市

【内容】

米国国連協会の主催により開催される高
校模擬国連国際大会 (16th Annual Global
Classrooms International High School Model
UN Conference) に、グローバル・クラスルー
ム日本委員会主催の第 8 回全日本高校模擬国
連大会 (Global Classrooms in Japan 2014)
にて選出した高校生が日本代表団として参加
することへの支援。同大会には米国国内を含
む世界 20 か国から総勢約 1500 名の高校生
が参加。



1) 日本代表団 (12 名)

実践女子学園高等学校

関口 麻緒、田中 初海

渋谷教育学園渋谷高等学校

園部 莉菜子、古川 友理

聖心女子学院高等科

明石 美優、佐々木 初奈子

桐蔭学園中等教育学校

岡野 源、真坂 卓実

灘高等学校

西尾 慧吾、西山 尚希

六甲高等学校

佐伯 壮一郎、東 由哲

2) 引率教員 (6 名)

奥井 雅久 (実践女子学園高等学校)

室崎 撰 (渋谷教育学園渋谷高等学校)

Gavin Du y (聖心女子学院高等科)

橋本 雄介 (桐蔭学園中等教育学校)

宮田 幸一良 (灘高等学校)

吉村 信夫 (六甲高等学校)

3) グローバル・クラスルーム日本委員会 (5 名)

評議員・派遣団団長 竹林 和彦

(早稲田実業学校教諭)

理事 馬欠場 直人 (慶應義塾大学 2 年)

理事 齋藤 優香子 (慶應義塾大学 2 年)

研究主任 大内 朋哉 (東京大学 3 年)

研究 神保 真宏 (東京大学 2 年)

4) 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (1 名)

模擬国連推進部 竹原 彩乃

派遣報告

【派遣日程】

4月19日(日)	インフォメーション・セッション
5月12日(火)	日本出発 NY 到着 自由の女神見学
5月13日(水)	UNDP 訪問
5月14日(木)	国際大会開会式
5月15日(金)	国際大会 1 日目
5月16日(土)	国際大会 2 日目 国際大会閉会式
5月17日(日)	NY 出発
5月18日(月)	日本帰国



【参加会議】

学校名	参加者氏名	担当会議	議題
実践女子学園高等学校	関口 麻緒 田中 初海	United Nations Environmental Programme	Combating Deforestation
渋谷教育学園渋谷高等学校	園部 莉菜子 古川 友理	UN Women	Girls Education and Gender Equity
聖心女子学院高等科	明石 美優 佐々木 初奈子	World Health Organization	Malaria, TB and Infectious Diseases
桐蔭学園中等教育学校	岡野 源 真坂 卓実	General Assembly	Eradication of Poverty: Post 2015 Agenda
灘高等学校	西尾 慧吾 西山 尚希	General Assembly 3rd Committee	Humanitarian Intervention: Responsibility to Protect
六甲高等学校	佐伯 壮一朗 東 由哲	United Nations Development Programme	Sustainable Energy for All

April 19

【インフォメーション・セッション】

日本出版会館の会議室にて、渡米前の説明会及び政策発表会を行いました。評議員による激励の言葉を受け、派遣生達は国際大会が目前まで迫っていることを改めて認識したようでした。

政策発表会では、担当国であるシリアの大使として、担当会議ごとに設定された議題について自分達の政策を英語で発表しました。派遣生達は、外務省よりお越し頂いた、アフリカ部アフリカ第一課の菊池様からのフィードバックや派遣生間での質疑応答を通じて担当会議・議題についての理解を深めました。

また昨年度より全日本大会に二議場制を導入した都合上、一部の派遣生同士は今回が初の顔合わせとなりましたが、午後から行われた英語でのグループディスカッションを繰り返す中に打ち解けていきました。

今年度も過去の国際大会派遣生が多く集まりました。派遣生達は様々なアドバイスを受けるなどして有意義な時間を過ごしました。



May 12

【日本出発・NY到着】

成田国際空港からジョン・F・ケネディ国際空港へと出発しました。インフォメーション・セッションの時とは打って変わり、派遣生達は皆リラックスした様子でした。

ニューヨーク到着後はバス、フェリーにてリバティー島に上陸し、自由の女神像を見学しました。



May 13

【UNDP 訪問】

中満泉国連事務次長補及び国連開発計画総裁補兼危機対応局局長を訪問しました。中満氏からはご自身の取り組みのお話のほか模擬国連会議に向けた激励のお言葉を頂きました。国連で働く方ならではの話を聞くことが叶い、派遣生達は大きな刺激を受けておりました。

中には国連開発計画の会議に参加する派遣生もあり、現場の生の声を聞いたことは会議においても大いに参考になったものと思われま



May 14

【高校模擬国連国際大会 開会式】

昨年度の改築工事以来初の国連本部総会本会議場での開会式となりました。世界各国から大勢の高校生が一堂に会すということで派遣生達も緊張しているようでしたが、式の開始までは、積極的に世界の高校生達と交渉を始める等、早くも大使として動き始めていました。やがて式が始まると派遣生達の目つきも次第に真剣なものへと変わっていきました。



May 15-16

【高校模擬国連国際大会 会議 1 日目】

模擬国連会議がグランドハイアットホテルにて行われました。派遣生によって参加する会議や扱う議題も様々でしたが、どのチームも変わらず真剣に他国大使と交渉し、自国の国益達成を目指しました。



【高校模擬国連国際大会 閉会式】

会議終了後、閉会式が開会式同様に国連本部総会本会議場にて行われました。今派遣事業では桐蔭学園中等教育学校が Honorable Mention 賞を、六甲高等学校が Best Position Paper 賞を受賞しました。世界を相手に二日間の会議を駆け抜けた高校生達の表情はとても清々しいものでした。



May 17-18

【高校模擬国連国際大会 会議 2 日目】

初日の会議行動が思うようにいった派遣生もいかなかった派遣生も直前まで会議戦略を練り直した上で、2日目の会議に臨みました。どの派遣生も自分が設定した目標に向かって最後まで諦めずに交渉を続けました。



【NY 出発・日本到着】

ニューヨークでの6日間はあるという間に過ぎ去り、17日にジョン・F・ケネディ国際空港を出発し、18日に帰国しました。異国の地で見事会議を乗り切って帰ってきた高校生達は事業前に比べて何倍も遅くなったように見えました。



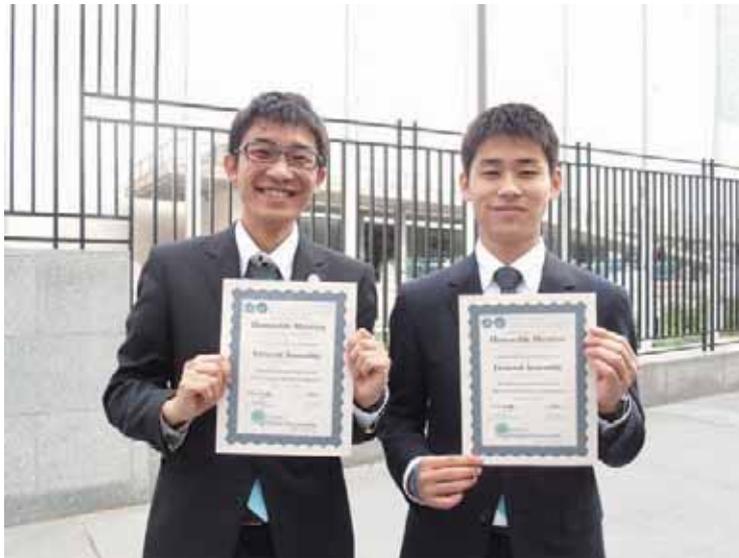
■ 受賞

本年度、日本代表団は2校が賞を受賞しました。

General Assembly で "Eradication of Poverty: Post 2015 Agenda" という議題に取り組んだ桐蔭学園中等教育学校が優秀賞（Honorable Mention Award）に、UN Development Programme で "Sustainable Energy for All" という議題に取り組んだ六甲高等学校がベスト・ポジションペーパー賞（Best Position Paper Award）に輝きました。

【優秀賞（Honorable Mention Award）】

桐蔭学園中等教育学校



【ベスト・ポジションペーパー賞（Best Position Paper Award）】

六甲高等学校



馬欠場 直人

慶應義塾大学経済学部 2年

グローバル・クラスルーム日本委員会 理事

参加者報告(アドバイザー)

まず初めに今回で9回目となる、高校生模擬国連国際大会への日本代表団派遣支援事業にご協賛・ご後援頂きました諸団体の皆様、並びに日頃よりグローバル・クラスルーム日本委員会の活動をご支援下さっている全ての方々に厚く御礼を申し上げます。

私は当委員会理事として、同じく理事を務める齋藤、研究主任の大内及び研究の神保の3人と共に日本代表団を引率致しました。以下では理事として当事業に携わらせて頂いたことで改めて見えてきた模擬国連の教育プログラムとしての魅力について述べ、私の渡米報告とさせて頂きたいと思います。

模擬国連の醍醐味としては、自分が今まで全くと言っていいほど無関心だった国際問題との出会いや、知っているつもりになっていた担当国の意外な一面、そういった様々な情報に基づく政策立案から、他国の大使との時に緻密で時に大胆な交渉に至るまで多岐にわたるコンテンツが集約されていることがまず一つあげられるでしょう。そんな中、私が理事として今回の渡米に参加して、初めて世界大会を客観的に見たことで感じた模擬国連の意義は上に挙げたものとは少し違う次元にあるものでした。

- 「他者理解のプロセスの体感」 - ここに模擬国連の教育プログラムとしての意義があるのだと私は今、感じています。我々は異なる文化やそれに基づく価値観を持つ他者と出会った際、ただ自分の価値観を押し付けるのではなく相手を理解し、理解されようと努力せねばなりません。この手続きは口で言うほど容易いことではありません。もし誰もが理解しあえるなら

ば世の中の問題は多くがたちまちに解決しているでしょう。

模擬国連に関して言えば、日本大会と世界大会は評価される点も評価方法も大きく異なります。非着席討議が多く採択される日本大会と比べて、世界大会は公式発言や着席討議が好まれる傾向にある、といった両大会のギャップに派遣生達は困惑しているようでした。ただここで日本の価値観を押し付けることはエゴを押し付けることとなんら変わりありません。かといって私は自分らしくあることを否定しているわけではありません。自分らしさをいかに相手の価値基準の中で魅せていくか、ということをお願いしたいのです。

そのためにはまず、相手の価値観や考え方を理解しようと働きかけることが必要になってきます。誇らしいことに、今回の会議ではどの派遣生もそのことにいち早く気がつき行動してくれていたように思います。中には、公式発言や着席討議を有効に使って議場に働きかけ、拍手やスタンディング・オベーションをもらった生徒達もいれば、非着席討議の必要性・有用性を議場に認識させることに成功し、自分達の本領を発揮しやすい環境を作った生徒達もいます。そういった一瞬、一瞬は派遣生一人、一人が他者を理解し、また理解されたという瞬間であり、派遣生の中に他者理解の原体験として残ったことと思われま

す。運営に携わった身としては、将来的にこの派遣生達の中から未だに解決されない数々の国際問題の解決に取り組んでくれる人間が出てくることを心待ちにしたいと思います。ただ、この原体験を活かすも殺すもこれからの派遣生次第です。派遣生一人、一人が今回の派遣事業とどう向き合っていくか深く考察し、今後の糧としてくれることを期待しています。

さて、今年で国連は創立70周年ですが、グローバル・クラスルーム日本委員会は来年で設立10周年を迎えます。このような節目の時期に理事として高校模擬国連の運営をさせて頂くことを嬉しく思うと同時に、その責任の重さに身が引き締まる思いです。理事として今後ともより多くの高校生に模擬国連の素晴らしさを提供できるよう邁進していく所存であります。

繰り返しにはなりますが、今年度の派遣事業をご支援くださった方々に心より御礼を申し上げます。また、今後ともグローバル・クラスルーム日本委員会へ変わらぬご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

齋藤 優香子

慶應義塾大学法学部 2年

グローバル・クラスルーム日本委員会 理事

初めに今回の日本代表団派遣支援事業にご協力並びご後援いただいた諸団体の皆様並びにグローバル・クラスルーム日本委員会に関わってくださった全ての方に厚く御礼申し上げます。

今回の日本代表団派遣支援事業には、当委員会理事の齋藤と馬欠場がアドバイザーとして、研究の大内と神保が高校生の会議サポートとして日本代表団に同行させていただきました。以下では主に国際大会の魅力と今大会の派遣生の様子の二点を述べ私からの報告とさせていただきます。

まず、国際大会の魅力について記します。国際大会の魅力はまさしく「全く新しい環境で自分を試すことができる」ことではないでしょうか。全日本高校模擬国連大会とは違い使用言語は全て英語。南アフリカ、アメリカ、ドイツ等22カ国もの国々から1500人もの生徒が一堂に会します。人種が違えば価値観、考え方、常識全てが異なります。そのような環境で自分の常識を押し付けず柔軟に対応ができるか、価値観が全く違う人々の主張に耳を傾け、良い解決策を生み出すことができるかが試されます。日本の殻から抜け出し、新しい価値観に触れ、「世界でも通用する力」を模索し、試す機会こそが高校生に刺激を与え、高校生の成長につながると私は考えております。

次に今大会の派遣生の様子について記します。「国際大会は自分の思い通りにいかない。」「想定外のことばかりが起こる。」「今まで練ってきた会議戦略が通じない。」「英語で自分の意見がうまく言えない。」会議一日目が終わった後、そう嘆く派遣生が数多くいました。まさしく「世界の壁を突きつけられた。」そのような

感覚に陥ったのでしょうか。しかし、派遣生は皆、会議で自分の価値を見出す方法を必死に探しておりました。いかに人々の注目を得ることができるのか、いかに自分の風を議場にふかせられるのか、些細なジョークさえも必死に研究していた彼らの精神力に驚きました。泣いても笑っても会議最終日の二日目。各チーム前日に準備したスピーチやジョーク、練り直した会議戦略を使い、グループの橋渡しを行う等最後まで健闘しておりました。その甲斐もあり、今大会は結果として優秀賞にあたる Honorable Mention 賞、政策立案賞にあたる Best Position Paper 賞と二つの賞を得ることができました。

今派遣事業にアドバイザーとして引率し、ここまで高校生を魅了し虜にする模擬国連に不思議な力を感じ、自分自身が行っている事業の必要性を切に感じました。自分自身がこの事業を通してどのようなことを達成したいのかも少しずつ見えてきたように思います。今派遣事業が派遣生のみならず自分自身を成長させ、それがグローバル・クラスルーム日本委員会の繁栄につながる原動力になれば幸いです。

最後に今派遣支援事業に同行したアドバイザーとして、またこの日本代表団のOGとしてささやかな言葉を派遣生に残し私の報告とさせていただきます。この派遣支援事業で「今までの自分を越える」ことはできたでしょうか。納得の行く会議行動をとりたい、受賞したい、なるべく多くの人と協力したい等々各個人が目標を持ち、満足の行くよう、悔いの残らないよう精一杯努めたことでしょうか。それは偏に受賞したかどうかで測れることではないと私は考えます。すなわち、受賞したか否かは一つの指標にしかならないということです。それよりも今大会で多くの壁にぶつかる中で見つけた自らの課題を乗り越えてこそ今派遣事業の意味があるのではないのでしょうか。今後も派遣生が「今までの自分を越える」ことを目標に歩みを止めることな

く、各分野で羽ばたいていくことを心から願っております。

繰り返しにはなりますが、派遣支援事業にご協力いただきました全ての諸団体の皆様及びグローバル・クラスルーム日本委員会に関わってくださった全ての方々に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。今後ともグローバル・クラスルーム日本委員会へ変わらぬご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

大内 朋哉

東京大学法学部 3年

グローバル・クラスルーム日本委員会 研究主任

高校生が模擬国連から得られるものは非常に多様です。担当国や国際問題に関する情報収集や政策立案の能力から、会議での議論・交渉の能力に至るまで、将来彼らが社会へ飛び出していく中で重要な能力が多く含まれていると私は考えています。その中でも、今回派遣生が出場した高校模擬国連国際大会は、模擬国連から一般的に得られるものだけでなく、派遣生に様々な機会を与えてくれました。派遣生の会議準備や会議行動をサポートしてきた研究主任という立場から、彼らの成長と国際大会の意義を振り返りたいと思います。

シリアという担当国を与えられて以来、派遣生はおよそ半年にわたり会議の準備を進めてきました。中には議題に精通する方のお話を聞き、それを政策立案に生かそうとする生徒もいるなど、派遣生が受動的にではなく、自分達から能動的に情報を集め、政策を洗練させようとする姿勢を感じる事が多くありました。こうした会議準備と政策の量と質、そして与えられた機会からできる限り多くのことを吸収しようとする貪欲さは、国際大会の他の出場校と比べても特出していたと確信しています。

会議本番では、各派遣校がそれぞれ困難に直面しました。日本とは違う会議の進み方に戸惑ったり、議論の主導権をとるのに悪戦苦闘したりと、派遣生の想定を超える事態が続きました。しかし、派遣生は気持ちを切らせることなく、各場面で彼らは自らのやるべきことを見つけ、自分達がその会議に最大限貢献するための努力を最後まで続けていました。彼らが議場でやり残しを作ることなく、自分達が議場にいた足跡を残せたことは、自分たちの成果として彼らの

中に一生残ることと思います。

会議を終えたばかりの派遣生は、ほぼ全員が悔しさを口にしていました。会議で自分達のできることをほぼやりつくしても、彼らが悔しいと感じたのは、全力で会議に向き合えたからであり、現状に満足せず更なる成長を求めているからだと感じています。今年度の国際大会は、多くのことを吸収しようとする派遣生の貪欲さをさらに刺激させてくれる、非常に実りあるものとなりました。

世界各地から集まった同世代の人々と真剣に議論する機会を与えてくれることが、国際大会の意義の重要な1つであると私は考えています。日本と外国では、模擬国連の性質は異なります。しかしながら、優れた交渉術や人を引きつける人材の条件など、派遣生は他の参加者から随所で学んでいる印象を受けました。一般的に言われる英語力はもはや問題ではなく、むしろこうした交渉人としての素質を派遣事業では今後高めていく必要があると私は感じています。今大会で世界水準の能力を目の当たりにできたことは、活躍する舞台が日本であれ外国であれ、彼らの今後の目標として大きな財産となるでしょう。

国際大会への準備を始めるのに際して、派遣生には個人がこの大会を通して何を達成したいかを考えてもらいました。会議を終えて、アワードを受賞できなくてもその目標を達成できたという人もいれば、アワードを受賞しても個人的には課題が残るといった人もいることでしょう。国際大会での彼らの活躍は、多くの自信を彼らにあたえ、同時に新たな目標をそれぞれに与えたはずです。この国際大会が今後の彼らの活躍にむけた1つの起点となることを期待します。

最後になりましたが、今回の高校模擬国連国際大会への派遣事業をご支援、ご協賛してくだ

さった皆様に深く感謝いたします。今回の派遣事業を含め、これまでの派遣事業で蓄積されてきた経験を来年度の派遣へと生かせるよう、これからも努力を続けていきたいと思ひます。

神保 真宏

東京大学教養学部 2年

グローバル・クラスルーム日本委員会 研究

はじめに、今年度の派遣事業にご協賛・ご後援及びご協力頂いたすべての方々へ御礼申し上げます、無事今回の派遣事業が終了したことをご報告いたします。

今年度は前年度とは異なり、大学生スタッフが4名渡米いたしまして、私は大内とともに主に会議サポートを主眼に派遣生に同行いたしました。

私は大学で模擬国連を始めました。高校の模擬国連に関してはほとんど無知でした。そんな私がどのような役割を担うべきなのか。貴重な高校時代の多くの時間を模擬国連に費やしてきた派遣生の集大成に私が何を添えられるのか。

4月中旬に派遣生の皆と初めて顔を合わせました。そこで私が感じたのが、実力はあるのにそれに見合う自信がないのではないかと、ということでした。政策プレゼンや、英語でのディスカッションの機会を設けたのですが、緻密なリサーチに基づく政策のプレゼン、活発に行われるディスカッションが行われ、国際大会もあまり心配ないなと個人的に思っていました。しかしながら彼・彼女らと話してみると、不安ばかりが募るようで、個人的には衝撃を受けました。私の高校生時代よりもグローバルな視野を持ち、国際問題への関心も高く、母国語でない英語で議論する能力もある。そんな彼・彼女らは、国際大会でなにかを得るには十分な素質があったと思います。だからこそ、今回の派遣事業をより実り多きものにするために、私にできることは「さらに一步踏み出す」手助けをすることだと考えました。

もちろん国際大会を目にするのは派遣生に

とって、私にとっても初めての経験でした。事前にOB・OGから「かなり日本の模擬国連とは異なる」とは聞いていたのですが、やはり実際目にするるとカルチャーショックでした。彼・彼女らも準備はしていたものの、やはり、特に初日は、自分たちの「当たり前」が通用しないことに戸惑っていたように感じます。しかしながら、約半年間の準備は裏切らなかつたようで、各々が精力的に他の参加者と会議を楽しんでいる姿を見ることが出来ました。

話は変わりますが、「模擬国連」活動をしている人間には様々な目的があります。「国際問題への理解を深める」「国際機関における交渉の難しさを実感する」「自分の意見を通せるような議論の枠組みを考える」などなど…。結局、高校生が今回の派遣事業を通し、何を感じ、何を得たのか。それにも多様性があるのだと思います。彼・彼女らは今後「模擬国連の専門家」として生きていくわけではありません。今回、私が派遣生に伝えた数少ないメッセージの一つとして、「自由性の高いこの派遣事業を実りあるものにするには、自分としっかりと向き合い、達成したいことを明確化し、それに向かって邁進することが大切だ」ということがあります。彼らが何を目標とし、何を得たのか、それについては後頁にございます派遣生の報告をご覧ください。

1週間の本事業、会議の2日間は、たしかに派遣生の「高校模擬国連生活」においては集大成となりますが、これからの派遣生の人生にとっては大きな「一步」に過ぎないと考えております。その大きな「一步」から、9期派遣生の皆がどのような人生を歩むのか楽しみでなりません。

また、私は来年度もこの派遣事業に同行する予定でございます。将来の派遣生に言えることは、「この派遣事業は大きなチャンスである」ということです。議題に関する知識を得ることが出来ます。半年近くの会議準備を通し、いやで

も自分と向き合うことになります。自分の強みを見つけるチャンスです。会議に参加することで普段出会う機会のない人たちとの交流が広がります。他にもさまざまなチャンスとすることができると思います。あなた次第で。

現在、日本での模擬国連活動は高校、大学を中心に拡大を続けています。(知らぬうちに私の母校でも本格的に取り組むようになったそうで、とても驚いています。)また、今年は国連創立70周年ということで特に注目を浴びる機会も多いように感じます。これを好機にますます模擬国連活動が活発になるよう、そして一人でも多くの高校生に触れてもらえるように尽力してまいる所存です。

また、来年度この派遣事業は10回目を迎えます。これからもこのような大きな可能性を秘めた事業を継続的に実施できるよう、引き続き、皆様のご協力を賜りたく存じます。

最後に繰り返しになりますが、今回の派遣事業を支えて下さった方々に、グローバル・クラスルーム日本委員会の一員として厚く御礼を申し上げ、報告を終わらせていただきます。

参加者報告(派遣生)

関口 麻緒

実践女子学園高等学校 3年

国連とは国際連合憲章の下に設立された国際組織であり、その活動目的は、国際平和の維持、経済や社会に関する国際協力の実現である。

模擬国連は、国際会議のシミュレーションを通じて世界の様々な課題について学ぶものである。この大会を通して世界からの視点で物事を考え、他者と協力して正解のない問題の解決方法を探るという大きな取組から私たちが得るものは多い。

私がこの模擬国連の世界に足を踏み入れたのは、中3の時、当時世界大会に派遣された先輩の活躍を知り、興味を持ったことがきっかけである。しかし私は帰国子女でもなく、英語に関しては中学で学んだ知識のみ、国際問題に関しても何もわからずただ流れに任せて練習会に参加しているだけだった。そんな私が高1で全日本大会に出場することになったときは信じられない気持ちでいっぱいだった。結果その年は賞を逃し、悔し涙を流すこととなった。新たな気持ちで再挑戦となった今年の全日本大会ではサウジアラビア大使として食糧安全保障についての会議が行われ、会議における交渉力が認められ、最優秀賞を獲得、ついに念願のニューヨーク行の切符を手にする事となった。

今回世界大会に参加するにあたって、私たちに与えられた国はシリア、議題は Combating Deforestation である。シリアと言えば、誰もが思い浮かべる紛争地帯である。その圧倒的な情報不足に苦労することとなった。

まず、シリアの歴史から始め、議題である森林の状況、環境政策、そして世界での環境についての取り組みについてなどのリサーチを行っていった。シリアは砂漠地帯、森林率はわずか 1.4 パーセント。自国から世界へ発信できることがな

く、提案する政策を考えることに大変苦労した。結局、シリア独自の政策は断念し、Low forest cover country としての政策を考えることにした。住民の意識不足による違法伐採に対して、意識向上のための森林再生プログラムの実施を呼びかけることにした。そのための資金、技術援助に REDD+ を用い、Low forest cover countries に不利な援助システムの改善、しっかりとしたシステムの確立を要求していこうと考えた。もしシリアでの森林再生が成功すれば、それは世界中どこでも適用することができるはずだと訴えることができると思ったからだ。

何よりも苦労したことは、私自身の英語力の不足である。すべての資料を英語で読み進めなければならない、大量の資料を前に辞書を片手に悪戦苦闘の毎日となった。自分の力不足をこんなにも感じたことはなかった。それでも諦めずに、先輩や先生方に助けをもらいながらすべての資料を読み、政策を考え、次の日には自分の政策にダメ出しをすることを繰り返した。泣きたいほどの苦労を乗り越え、ようやく出発にこぎつけることとなった。

私は、諦めずに取り組んできたことを国際大会での力に変え、必ず有意義な大会にしようと決意してニューヨークに向かった。

国際大会 1 日目、1st session で最初の壁にぶち当たった。私の耳では会議の英語がうまく聞き取れないのだ。英語力の不足だけでなく、おそらく、会議全体の雰囲気にもまれてしまったことが原因の一つだったのだろう。そのうえ、提案しようと思っていた REDD+ を他の大使が知らないということも判明した。Chair はじめ、誰にも気にかけてもらえず、発言もできず、絶望感でいっぱいになり、何も楽しむことができず悔しさだけで終了を迎えることとなってしまった。2nd session では、その状況を打破し、絶対に会議に切り込もうと方針を変更した。REDD+ を切り捨て、住民の意識改善のための教育と資

金、技術援助を求めることにした。また、先輩からアドバイスをもらい、会議全体を見て、自分が何をすべきかを第一に考えるようにした。最初のグループから抜けて、もともと森林に関する状況が似ている中東諸国と組んだこともよい方向へ進むきっかけとなり、場の雰囲気になれたことも手伝って自分の意見も言えるようになり、注目してもらえるようになった。

大会 2 日目、3rd session では、前日の 2nd session で頑張ったおかげか、他の大使に顔を覚えてもらったようで、Moderated caucus で発言することができた。コンバイン（文書を統合）する前には DR（決議案）の sponsor になることもでき、ようやく会議を楽しむ余裕が出てきた。また、同じグループの大使に “You are doing a really great job.” と言ってもらえた時は本当にうれしさでいっぱいだった。

国際大会に参加する前、私は英語に対してコンプレックスを持っていた。派遣団の中では一番英語が下手で、うまく話さないと馬鹿にされると思っていたが、今、その考え方は間違っていたと思っている。私のつたない言葉でも誰も馬鹿にすることなく、積極的に発言すれば、一生懸命話していることをまじめに聞いてくれた。そして理解しようとしてくれた。世界の大使たちは政策を話せば賛同してくれ、それがもっと良い方向に進む道を考えてくれた。

大会を通して私が学んだことは、リサーチ力や交渉力だけではない。困難な状況でも諦めないこと、うまくいかなくても挑戦し続けることの大切さ、そして、他者と話をする時に相手を受け入れること、相手を認めることで関係が向上すること。様々なことを私に教えてくれた国際大会、賞は取れなかったが、全力で取り組んだことに後悔はない。この場で学んだ多くのことは、私に成長をもたらし、これからの人生において多くの役割を果たすことになると思う。

最後に、私が模擬国連に参加するにあたって支えてくれた先生方、友達、家族、そしてパートナーや派遣団の仲間たち、グローバル・クラスルーム日本委員会の方々、すべての方に感謝し、お礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。



田中 初海

実践女子学園高等学校 3年

5月15日、16日に高校模擬国連国際大会に参加しました。私はこの会議で賞は取れなかったものの、日本の会議では得ることのできないかけがえのない経験をすることができました。

私が模擬国連に興味を持ったのは中3の時でした。先輩が全日本大会で優秀賞を取り、ニューヨーク大会に出場することを知ったのがきっかけでした。当時の私は模擬国連がどのようなものなのか詳しく知りませんでした。同じ学校に世界を相手に戦う先輩がいることに感銘を受け、模擬国連の活動を始めました。高1で初めて全日本大会に出場し、全国から集まった高校生の交渉力、スピーチ力などのスキルの高さを痛感しました。この大会で賞は取れず、大変悔しい結果になりました。この経験と悔しさをバネに、高2でも全日本大会に出場し、今まで培ってきたことを全て出し切り、会議Aにおいて最優秀賞をいただくことができました。そして第9期派遣団の一員となり、今回のニューヨーク大会に臨みました。担当国はシリア、会議はUNEPの「森林破壊」についてでした。

ニューヨーク大会での会議は日本の会議とはかなり異なり、戸惑うことが多々ありました。また、自分の英語がどのくらい通用するのか不安でした。ニューヨーク大会では英語を母国語としている高校生がたくさんいる中で、私たちの主張がしっかりと伝わるかどうか分かりませんでした。しかし、ニューヨーク大会で問われたのは、英語の発音がどれだけ綺麗なか、難しい言葉を使えるか、ではないと思いました。他国の状況も踏まえた上で、いかに論理的で分かりやすい、そして熱意を持って伝えるかが大切だと感じました。

1日目。会議場に到着してまず挨拶回りに行きました。もう既にその時点で緊張していた私は必

死に笑顔を作っていたのを覚えています。でもその緊張をほどいてくれたのはJCGCの研究・理事の方々の言葉でした。「頑張っってね」と声をかけて固い握手をしてくださり、自分の中でリラックスできた気がしました。そして会議が始まりました。進行のペースは日本の会議とは大きく異なっていました。事前にOGの先輩方からどのような進行になるのか話は聞いていましたが、それでも戸惑うことがありました。一番の戸惑いはスピーチをした国がかなり少なかったことでした。スピーチができないことは想定していましたが、まさかここまでスピーチができる国が限られているとは思いませんでした。私たちの立場も明確にできないまま会議が進んでいきました。モデ（着席討議）でもなかなか当ててもらえず、1日目はほとんど発言できないまま終わってしまいました。1日目が終わって、JCGCのみなさんにアドバイスをいただき、ホテルに帰り、2日目のモデでどのような発言内容を振られても対応できるように何種類かのスピーチを考えて2日目に備えました。

2日目。1日目の失敗を挽回しようと、会議場に到着して早々他の大使と交渉を始めました。会議が始まり、決議案の内容についてのモデで積極的に何回も発言することができ、次第にリズムをつかめるようになりました。アンモデ（非着席討議）では決議案を作成、コンバイン（文書の統合）をしながらモデでは発言できるようになり、会議が次第に楽しくなりました。5つ提出された決議案は全て可決され、会議は無事終了しました。賞には届きませんでしたが、この会議で得たものはかけがえのないものとなりました。

高校生という進路を決める時期に模擬国連という活動をできた私は国際的な視野を持って自分の将来を考えられるようになりました。模擬国連を始める前はあまり明確な目標がなく、ただ「大学に入って勉強したい」と思っていただ

けでしたが、模擬国連を始めて、自分は「世界に貢献できる人になりたい」と思えるようになりました。このニューヨーク大会で得た経験は私が将来選ぶ道の土台になることは確かです。ぜひもっとたくさんの高校生に模擬国連に取り組んで、この魅力の虜になってほしいです。

私の模擬国連生活はこのニューヨーク大会で幕がおります。中3の時から夢見ていたニューヨーク大会は現実となり、大変内容の濃いものになりました。私にとって模擬国連は自分の高校生活を語る上で必要不可欠なものです。これは先生方、OGの先輩方、JCGCの方々のサポートがあったからです。また、第9期派遣団のみんなにも良い刺激をもらい、信頼できる大切な仲間になりました。支えてくださった全ての方に感謝を申し上げ、ニューヨーク大会の報告とさせていただきます。



園部 莉菜子

渋谷教育学園渋谷高等学校 3年

見てきたもの、聞いてきたもの

あの真っ黄色のはずのタクシーが、会議直後の私の目には薄れ、色褪せた山吹色に見えた。

二日間をともにし、終わったことをはしゃぐ大使から声をかけられても、私の耳にはその声はどこか遠いところから来ている気がした。

会議を終えるといろんな想いや感情が湧き出てきて、心で全てが打ち消し合った。

あれからしばらく経ち、この報告書を書くにあたって今回のニューヨーク派遣を振り返った。何を感じ、何を学んだのか、書きたいことはたくさんあるが、主に二点にまとめて書き残したいと思う。一点目は主にこれから模擬国連活動をはじめ、もしくは全日本や国際大会を迎える高校生への言葉である。二点目は会議を通じて見つけた、自分のための、これからへの決意である。

冒頭で触れたが、私にとってこの会議は決して「充実」し、「楽しい」ものと胸を張って言えるものにはならなかった。もちろんうまくいった場面もあり、楽しい場面もあった。自分のスピーチで拍手がおきたり、自分たちの決議案のグループをつくれしたりした。また大使たちと交渉しながら談話したり、自分の輪を広げたり出来た。しかし、ここでは良かった点よりも反省点や改善点を、次につなげるために書いていくとしたい。

一点目は自分が「何のために」模擬国連をしているのか忘れないこと。そして、「何のために」会議に望んでいるのか、自分のその「想い」を大切にすることについて。

話は遡るが、全日本大会を迎える一週間ほど前、自分の友人であり第八期派遣団の子とこんな会話をした。私は国際大会で賞を取った彼女に「賞

を取ってニューヨークへ行く!!」と意気込んだのに対して「勝つことを考えてたら、賞なんて取れなくなるよ。」と彼女は言い放った。この日の数日前に彼女と同じ練習会に出たのだが、そこでの焦り、自分らしさを消して、顔が強ばっている私を見たからこう忠告したのだった。その後「本当に会議をどうしたいのか考えないと。」とそう付け加えた。

この彼女の言葉の甲斐あって、もう一度パートナーの友理と全日本大会への、個人ではない大使としての目標や、議場で国際社会において目指すべきゴールを見つめ直し、確認し合った。ニューヨークへ行きたい気持ちはもちろん最後まで絶やさなかったが、その頃の私にとって、こんなにも準備をし、こんなにも国や世界について悩んだのは初めてだった。賞は二の次にし、まずは世界をよくする一歩として「大会」よりも「会議」に参加しようと胸に刻み、挑んだのが全日本大会だった。しかし、国際大会ではどうだったのか。世界をよくすることに追求し、シリア大使になりきっていたのかということ、そうではなかった。私は後戻りをしてしまった。賞を取るということを最優先にこだわっていたわけではない。とにかく出来ることを精一杯やって、楽しんで会議に挑もうと思っていた。だが、会議への残り日数が少なくなっていくにつれて、周りの期待も大きくなるにつれて、賞を取って帰ってくるべきと考えるようになってしまった。賞をとらないと、周りへ何も返せないと自分を追いつめるようになった。その結果、本番の会議では議場の進行が自分たちの好きなようにいかないことが助長して、会議中なのにどうしたら賞をとれるのか考えてしまった。思いっきりあたって、思いっきりくだけるべきところで私はむしろ情熱を失い、冷静になっていた。これから模擬国連活動をはじめ、もしくは全日本や国際大会を迎える高校生たちは「何のために」模擬国連をしているのか、その「想い」

を忘れることがないようにしてほしい。結果を出すことも必要な時もある。しかし、その「何のために」を達成しなければ終わった後、心の底からの達成感は味わえない。むしろ賞を取れたとしても、しばらくしたらその嬉しさは消え、何も残らない。初めて会議に出た時、世界のために何か一步踏み出せた気がした。私が模擬国連を始めた理由は単純に楽しいからであった。他国との交渉を通じて解決策を見つけ出すことが楽しかった。自分の担当国の国益が決議案に載せられたときの達成感や交渉がうまくいった時の充実感はたまらなかった。世界を知りたい、変えたいという強い「想い」のためにここまでやってきたはずなのに、上に行くにつれて目的が少しずつずれていった。会議が終わったあと、素直に自分の成し遂げたことを喜べるよう、これから会議に挑む人には「原点」の気持ちを常に持ち続け、中身をとことん追求してほしい。

二点目は自分の「武器」とは何か考え、その「武器」を大切にすることについて。

国際大会では世界から、全米から高校生が集まり議論を交わしていく。英語が母国語の人も、違う人もいる。また冷静に論理的に話す人もいれば、大声で情熱的に話す人もいる。そんな中、私が大切にしたのは「日本人」として「自分らしく」交渉していくこと。

一日目の最初の非公式発言の時、みんなが状況を把握しようと必死だった。いくつのもグループができ、みんなが政策を言い合っていた。私がいたところは相当大きい固まりで、余計何が起きているか分かりにくかった。リーダー格をとった大使が周りに意見はないかと聞く中、とにかく自分の政策を言い合う時間になった。何人が言った後、あまりにもみんなの方向性が違い過ぎて、リーダーの子も言うことがなく、一瞬静かになった。チャンスと思った私は、すかさず、今までリサーチをしてきたことや自分

の政策につなげながらも、それまで言った大使の発言をまとめることで発言力を高めた。もちろん、英語は完璧ではなかったが、言いたいことをとにかく大きな声ではっきりと言うことを心がけた。

自分の「武器」は怖じ気づかないこと。やりたいことに対して、言いたいことに対して、妥協せず、突っ走れることであると私は思う。心の奥では怖いときもあるし、戸惑うことを多々ある。しかしなんだかんだ言って、それを振り切ることができる私だから、この会議でもできると自分に言い聞かせ、この「武器」を使うことができた場面だった。

「日本人」として、リサーチを極め、政策に抜かりがないか論理的に考え、会議本番ではそれを発表するだけでなく、しっかり相手の話に聞く耳を持つ。これは日本の模擬国連を通して自分が学んできた術である。そして、「自分らしく」笑顔で、熱気たっぷりに失敗を恐れず、果敢に挑む。自分ならではの性格を活かして、会議に貢献していく。この二つの面を上手く使いこなし、最大限力を発揮することの難しさが身に沁みた二日間だった。特に自分の情熱を失っている時には自分らしくいることなんて出来なかった。国際大会を通じて私は日本人ならではの、細部まで工夫を凝らし聞く姿勢を持つ、自分ならではの、気さくで発信力あふれるところ、それらを持ち合わせた人であり続けたいと決心した。

国際大会をもって私の模擬国連生活の幕が閉じた。特に去年の夏から、あらゆる壁を乗り越え、これまで模擬国連と向き合ってきたが、その集大成ともいえるニューヨーク派遣は満足のいかず、反省点が多い会議になってしまった。何よりも、私が得意なはずのただ「楽しむ」ことができなかった。しかしだからこそ、この国際大会を活かして、もっともっと多くのことを学び、成長していく。これから私は日本の外に出て、

勉強していく。きっと世界の壁に打ち当たることだらけだろう。そんな時は、自分の「想い」に一途に忠実になり、持っている「武器」を使い果たすくらい使って、どんな困難なことでも乗り越えたいと思う。

最後に、これまで支えてきてくださった人たちへの感謝でこの報告書を終わらせたい。一人だったらここまで来れませんでした。本当にありがとうございました。

成田空港にある日本の旗がいつもより凛々しく見えた。真っ赤な日の丸は、私の心にも色鮮やかな色を照らしてくれた。

一週間ともにしてきた同期の別れの挨拶は、どこか寂しい声だった。

しかし、近い未来への希望を抱かせる、始まりの予感に過ぎなかった。



古川 友理

渋谷教育学園渋谷高等学校 3年

<担当国決定>

今からさかのぼること四か月前。担当国が発表された。その国は「シリア」。ちょうど後藤健二さん、湯川遥菜さんがISに殺害されたと報道された時期だった。国内情勢が全く安定していないこの国の印象は最悪だった。だが、五月には模擬ではあるにせよシリア国民を背負った大使として国際会議に出るのだ。シリア大使としてどんな顔をすればいいのだろうか、他の国からどんな非難をあびることになるのだろうか...不安がなかったとは言えない。でもそんな国を担当できる嬉しさもあった。調べていくうちに今まで気づくことのなかったシリアを発見できる、そう全日本大会の経験から確信していた。

<Girls Education and Gender Equity >

私たちの議題は「女子教育とジェンダー平等」に決まった。これを先進国目線で見れば、政策は比較的容易に編み出すことができる。だが私たちが大使を務める国はあのシリア。ジェンダー平等指数という世界各国の男女平等の度合いを指数化したものの数字は0.5775で世界139位(World Economic Forum, The Global Gender Gap Report 2014)と低いことは明白である。また長引く紛争により、女子教育はおろか、紛争前は国民全体の95%あった就学率も50%にまで落ちた。一方で見方を変えれば紛争前のシリアは中東の教育界をリードする存在だったのだ。これを知り、希望が見えた。シリアに教育の基礎は存在していた。時間はかかるがきっと紛争前のあのシリアに戻ることができる日が来る、そう信じることはやめなかった。そのために私たちがいる。「模擬」であることはあまり意識せず、本当にどうにかしなくてはいけない、強い思いがあった。

シリアの情報をインターネットだけに頼って得るのには限界があった。そこで私はイスラム社会を研究されている専門家の方に直接メールを送り、日本に紛争前に留学に来たという外語大生のシリア人 Vivian さんにシリア人女性としての生の声を聞き、次に道傳愛子氏のイスラムの女子教育の講演会に参加し、さらには UN Women 日本協会理事長の有馬眞喜子氏に学校にお越し頂いてお話を直接伺った。とにかく今の私とは全く異なった状況にある人たちを理解するために、データだけでは分からない情報の収集に努めた。この努力があったからこそシリアの状況をなんとか改善したいという気持ちを持ち続けることができたのだろう。

< 会議本番 >

いよいよ始まった世界大会。開会式に参加するため国連本部に入るとメディアのみで見てきた光景がものすごい迫力とともに広がっていた。そして様々な国から集まってきた活気あふれる高校生たち。胸の高鳴りを抑えられなかった。私の今回の大きな目的の一つである世界中に友達を作ることを達成するため、国連本部の開会式会場を駆け回った。英語は意外と問題ではないかと思えるほど楽しくてたまらなかった。翌日の会議への期待がますます膨らんだ。そしてついに議長から会議の開会が宣言された。多少の緊張が走る中、この貴重な機会を思う存分楽しもうと心に決めた。最初のうちは順調に進んでいたように思えたが、ここは世界大会。思うようには進まない。心配していた英語の壁には何度もぶちあたった。議論についていけなくなった時、悔し涙を流しそうになった。でもそんな時に私を奮い立たせてくれたのは自分がシリア国民を背負った大使であるということ。何としてでも練りに練った政策をこの会議で通さなければいけない。こんなところで負けてはいられない。その使命感は私

の中に残り続けた。

また、もう一つ私を支えてくれたのは仲良くなった大使の存在だ。彼らとの会話が楽しくて励まし合えたからこそこの会議を乗り越えられたと思う。多くの人が日本から来た私たちに興味を示してくれた。キティちゃんのストラップをケータイにつけている女の子を見つけてすかさず話しかけた。そうすると、日本人の私に出会えたことをとても嬉しく思ってくれて、その後の会話が弾んだ。一番仲良くなったのはカタル人のインドネシア大使だ。彼らには何度も助けられたし、何物にも代え難い信頼関係を築くことができた。

ここで学んだのが、最終的には「自分自身」をどう他の大使にアピールするかが大事になってくるということだ。大使になりきっている仮の自分ではなく、本物の自分の姿、相手の姿をお互いが知り、個人として仲良くなること。これが信頼につながり、結果、大使としての国益を守っていくうえでも有利に働く。事実、その人自身をよく知り仲良くなると「大使」という枠を越えた親近感が湧き、面白いほどスムーズに交渉が進むのだ。結局、国を動かすためには人の心を動かさずには何も始まらない。それほど「人」と「人」との関係は重要だということに気づかされた。

< 最後に >

結果、私たちは受賞することはできなかった。審査基準が曖昧な模擬国連で賞を目指すことが正しいのかどうかはまだよく分からないのだが、悔しさは残った。だが、会議終了後、あのインドネシア大使が “You are a really hard worker. We will give you Qatar award” と言ってハグしてくれた。その瞬間、今までの日々がフラッシュバックされ涙がこぼれ落ちた。その涙にはかけがえのない人たちに出会えた喜び、ここまで応援してくれた人たちに受賞の報告ができなかつ

たことの悔しさ、この会議を終えた達成感、そして彼らとの別れの寂しさ、色んな感情が含まれていた。また、多種多様な人があふれるこの世界で、たくさんの人と出会い、彼らから吸収し続け、そして彼らを魅了できるような人でありたい、そう思い私の高校模擬国連生活は幕を閉じた。

私がここまでの道のりを歩むことができたのは、学校の先生、先輩方、友達、家族、八月から苦楽を共にしてきたパートナーの園部、そしてグローバル・クラスルーム日本委員会の方々の支えがあったからです。この場を借りて心から感謝申し上げます。ありがとうございました。



明石 美優

聖心女子学院高等科3年

ニューヨークの舞台が手の届かないものから夢、目標、そして現実へとかわった私の高校模擬国連ライフ。帰国して4日が経った今、それについてこの場をお借りし振り返りたいと思う。初めて参加した中3の模擬国連練習会議、それは同年代の生徒たちが膨大な知識をもとに一国の大使として意見をしっかり持ち述べながら周囲をまとめ、かつ英語で成果文書を仕上げるといって圧倒されることばかりの場だったことを覚えている。全日本大会やその上にある国際大会の存在も知ってはいたが、自分には関係のない話とさえ捉えていた。しかし高1で全日本大会出場のための校内選抜に落ち国連大学での本選を見学してから、悔しさとともにまずは来年この場に見学者ではなく出場者として帰ってきたいと思い、模擬国連への意識が変わった。そして時は流れ2014年11月、第8回全日本高校模擬国連大会で第9期派遣生として選出された。それ以来、現在おかれている状況が世界的にみても極めて特殊なシリアという国、そして多種多様でそれぞれ対策も異なる感染症という議題に向き合ってきた。この半年弱は、海外生活の経験がない私にとって英語の壁が立ちはだかるであろうことは容易に予想できたのでそちらの練習もしつつの、体力面・精神面ともに辛いこともある準備期間であった。渡米前のグローバル・クラスルーム日本委員会主催のインフォメーションセッションでは、英語でのディスカッションで思うように発言できず、焦りと悔いを感じたことも記憶に新しい。このように大会準備は、挫折を繰り返し、その他勉強や部活との両立も含め決して楽なものではなかった。しかし今振り返ってみると、忙しさや不安のなかに、リサーチで吸収した情報をもとに自ら物事を深く考え

ることで得られる充実感のようなものも感じられていた日々だったと思う。

2日間の会議のなかでも困難な状況はいくつも私達を待ち受けていた。リサーチをもとに作った、全感染症に対応可能であるだけでなく混乱地域への具体的な対策も含んだ政策を軸に、協力したいと思っていた国の大使の遅刻・欠席など想定外のことがあった。会議準備とは別に練習していた英語だが、やはりネイティブスピーカーの早い会話に取り残されそうになり、特に初日午前には周りに圧倒されてしまった部分もあった。また会議進行や大使達の特徴も日本とは異なる点が多く、渡米前に先輩方から伺ってはいたが戸惑いがあったことも事実だ。しかしそこで挑戦することを諦めずに気持ちを切り替え最後まで取り組めたことは、この派遣で得た今後の自信に繋がるもののひとつである。たとえ拙い英語でも、こちらの伝えたい/受け取りたいという気持ちがあれば、信頼関係をもとにコミュニケーションがとれるということを通し、人と人とを繋ぐものが最後は相手に対する真摯な態度であるとも再確認できた。

会議全体の動きとしては、1日目午前中に協力していた少人数のグループが大きなグループとコンバイン（文書を統合）する形になった。しかし時間が足りず、議場にその他3つできたDR（決議案）と似ている内容が多く、またWHOという議場でありながらも、DRを1本にはできなかった。そのため会議の終盤は互いの疑問点を非着席討議で解消してから投票へ移る流れだった。大会結果としては全日本大会のように受賞することは叶わず、今思い返すと最初の小さなグループをまず固持していたら結果は違ったのかもしれないと思う。だが今回学んだ人の多く集まる場でどう生き残っていくかは、それが日本でも世界でも共通で、いかにして自分個人の意見を主張しつつ、周囲にも目を向け全体に

貢献できるかにあると思う。私はペアと役割分担をしていて、どちらかといえば全体への尽力を担当していた。例えば、グループ内で意見をまとめ文章化している間にそれに賛同してくれる他国大使を見つけたり、議場把握といってコンバインも見据えた上で他のグループの政策やその賛同国を調べてまわったりだ。前者では自分たちの政策を熱意は持ちつつ簡潔かつわかりやすく説明することが、後者では移り変わる状況にオンタイムについていくことが、それぞれ重要になると私は考える。時に、説明をあまり真摯に聞いてもらえなかったり、理由も聞けないまま断られたりもあった。しかしこの考えを確固なものにできる数々の出会いもあったのだ。「母国語ではないでしょ？あなたの政策説明はとて立派よ。」と言ってくれたルワンダ大使・「同じアジア人としてこのグループのために英語で必死に働くシリア大使を誇りに思う。」と言ってくれた中国出身のイラン大使・「日本人が何事にも真面目だというのは本当なんだね、同じグループで作業できて嬉しいよ。」と言ってくれたインドネシア大使・「あなたの問いは私の望む的を得た質問だったわ、あなたと話せてよかった。」と言ってくれた他グループ代表のブラジル大使...外国の文化なので日本より相手を褒める傾向があることは承知している。だがこれらの言葉が私にどれだけの喜びと達成感をもたらしたことが、日本での会議から交渉にまわることが多く、いかに手短な説明に伝えたい内容を丁寧に組み込むかと、どれだけ会議中に広い視野をもてるかを追求したいと考えてきた。そんな私にとって、波瀾万丈がつきものの模擬国連で各国との信頼関係を築き、15か国以上のシグナトリーを書き込んだスケッチブックを片手に各国大使を訪ね議場中を駆け巡った時間は、インフォメーションセッションで英語に臆したという後悔を世界で晴らすものであったことに加え、それ以上に模擬国連を楽しめた瞬間だった。

前述の通り受賞は逃したわけで、大会に賞というものがある以上やはり悔しさがなければいけません。しかし高校時代に世界を相手に挑戦し、自身の可能性に限界を作らずむしろそれを広げることができる、このような貴重な機会に恵まれたことを大変光栄に思う。今後は、世界の縮図に飛び込み学んだ、大勢の中で圧倒されても諦めず自分の存在意義を見つけ主体的に行動することと、そのとき忘れてはいけない周囲との関わり方について、近い将来社会人になる身として自分がどうありたいか思考する糧としつつ後輩達にも伝えていきたい。

最後になりますが、この派遣事業に携わって下さった皆様に感謝の気持ちを伝えたいと思います。お忙しい中お時間をつくって下さった国連開発計画の中満様、私達の渡米が円滑になるよう尽力して下さいましたユネスコ・アジア文化センターやその他ご支援して下さいました皆様、現地まで引率し常にそばで私達を支えて下さった先生方、日本での会議準備の際相談にのって下さるだけでなく渡米後も日本から応援して下さいました先生・先輩方、議題は違うけれど共に渡米し同じシリア大使として会議に臨み励ましあいながら濃い1週間を過ごした派遣9期、今迄の練習会議・全日本大会で共に模擬国連に取り組み多くの刺激を与えてくれた皆、様々な形でメールを送ってくれた家族と友人、そして今回の渡米に関し私達を全面的にサポートして下さいましたグローバル・クラスルーム日本委員会の方々、特に会議準備面・精神面ともに派遣生を常に支えて下さった引率の理事・研究の方々、本当にありがとうございました。



佐々木 初奈子

聖心女子学院高等科 3 年

まず初めに、世界大会という素晴らしい舞台に立たせていただいたことに心から感謝申し上げます。

昔から姉の背中を追い続けてきた私は、模擬国連も姉への憧れから始めました。念願が叶い参加した模擬国連では、多くの能力が求められることを実感しました。リサーチに際限はなく、スピーチや英語の力は高いに越したことはありません。また、スポーツのように体力も鍵となります。自分には模擬国連に出るだけの多様な能力が備わっているのか自信がありませんでしたが、思う限りを尽くそうと世界大会に臨みました。

私達は World Health Organization の会議で "Malaria, TB and Infectious Diseases" について議論しました。残念ながら世界大会で受賞することはできませんでしたが、今大会で私が出たものを、会議行動と共に振り返っていきたいと思います。

< 会議一日目 >

会議一日目は正直に言うと、失敗の連続でした。始めのモデ（着席討議）で発言権を得ることができ、準備してきたスケッチブックを見せつつ、皆に視覚的に訴えることに成功しました。しかし、反響があった自分のモデでの発言をグルーピングに繋げることができず、最初のアンモデ（非着席討議）で次々とグループが形成されていく中、私達は置いてきぼりにされていきました。その後もグループを上手く形成することができず、気が付くと時間ばかりが過ぎていき、焦りと不安で潰れそうになりました。このままでは終われないと、とりあえず少ない国でグループを作る為に、暇そうにしていた大使に声をかけ、どうにかワーキングペーパーの作成を始めました。しかし、国数が少ない事に大使たちが不満を持ち始め、結果的に大きなグループに合併されてしまいました。この

時に私は今のグループで一緒に行動する必要性を思うままに訴えればよかったものの、嫌がっている大使と真摯に向き合う勇気がなく、初日はスポンサーになることができず会議は終わってしまいました。

< 会議 2 日目 >

1 日目から気持ちを切り替えて臨んだ 2 日目。初日の反省から、自分たちが今までインプットしてきたことを率直に他国に働きかけるように心がけました。積極的に DR（決議案）作成に携わり、私達の主張していた緊急時における政策をどうにか盛り込む事に成功しました。また、私達の頑張りが認められ、2 日目はスポンサーとして入れてもらえることができました。抜群な交渉力がなくても地道に会話に参加し、誠実な姿勢を示せば、必ず周りの人は認めてくれることを実感しました。その後は DR を提出し、投票にかけられ賛成多数で可決されました。

会議全体を通して、私は自分の未熟さを痛感しました。今会議の様子を思い起こしてみても、反省すべき点は多々ありました。しかし反省を活かし挑戦することで、2 日目には自分の殻を破り会議に向かって邁進できたと思います。同時に今回の会議で自分の能力をさらに伸ばし、次なる目標に向かって飛躍していきたいと心から思うようになりました。多くの能力が求められる模擬国連で最も大切なことは何か。それは衝突を恐れずに人と真剣に真正面から向き合うという、言葉では簡単ですが実行するのは難しいことだと感じました。特に国際大会で語学力的にハンデがある中で、困惑から周囲の顔を窺いたくなります。しかし、自分たちを受け入れ信頼してもらうには、始めは抵抗感があるかも知れませんが、正面から向き合うことが重要だと思いました。

改めまして今まで私を支えて下さった皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



岡野 源

桐蔭学園中等教育学校 6 年

高校模擬国連国際大会で賞をとりたい。世界一の大使になりたい。その一心で僕はこの3年間、模擬国連に懸けてきた。その結果が、このニューヨーク派遣であり、僕たちペアがとった優秀賞なのだと思う。世界一にはなれなかった分、やはり悔しさは残る。しかし、僕はこの派遣で、それ以上に大事なものに気づかされたと思っている。

僕が模擬国連を知ったのは小学6年生の時。学校説明会で知り、世界大会で活躍したいと持っていた。中学三年生のころから本格的に活動を始め、全日本大会で最優秀賞をとり、この大会はまさに今までの僕の模擬国連の集大成だった。僕たちのペアは General Assembly (国連総会) で POST 2015 : Eradication of Poverty という議題の会議に取り組んだ。貧困撲滅という議題でシリア大使を演じるということは、単純に世界中の貧困をなくすためにはどうすればいいか、という問いを考えるだけでは足りなかった。今までの僕たちの政策の方針としては、「まずは国際的に必要なこととは何かということを手挙げ、そのうえで自国の国益を達成するためには何かを考える」という、国際益ありきの方針だったが、世界の異端であるシリアではそうはいかなかった。シリア政府として、何が一番大事なのか、それをどのようにすれば貧困の撲滅につながるのか、必死に考え、調べ上げた。その結果として、「貧困をなくすためには、まずは紛争の解決が大事」という結論にたどり着いた。

ここまでやった(つもり)の僕たちでも、日本の NY 派遣団の中でもリサーチはあまりしていない方だと思っている。まず自国の情勢についてもあまり調べていないし、そもそもシリアってどんな国?と聞かれても他の大使以上に詳しく語れる自信もない。他の派遣団の皆は、「そ

の国の国連大使」どころではなく「その国の国民」を常日頃から演じていたのだ。しかし、そんな僕たちでも、議場ではといえば、一番情報を持っていた大使だった。その時、これこそが日本人の強みなのだらうと思った。たゆまぬ努力と飽くなき探求心、日本人が持つその力は、世界の場でも評価されていたと思う。情報を持っているということは、決議を書く模擬国連の会議では、もっとも要求されることの一つであるのだから。

会議のことについて少し触れる。最初の僕は全く役に立たなかった。少しアクシデントが派遣期間中に起こり、自分の英語にまったく自信が持たなくなってしまったのだった。それが僕の行動全体に波及していき、思考がすべて停止していた。そんな中でも、JCGCの皆さんは僕たちにエールを下さり、先生もパートナーも僕のことを信頼してくれた。そこから、「英語がしゃべれないのは仕方がない。諦めよう。だからこそ、話す以外でできることを見つけて、自分の最大限を尽くそう。」と思い、決議案の作成や議場全体の把握をやっていった結果、少しずつ自信を取り戻していき、次の日には議場全体へのスピーチもすることができた。できないことをできないと諦め、できることをやると考えられる決断力が、功を奏した瞬間だった。

僕たちペアとしての動きはというと、やはりアメリカ人の大使たちとは違って、あまり目立ちとうとはしていなかった。動議も他の大使が挙げたものに便乗していたし、議場を走り回って自分たちの意見を広げようとしなかった。ただその分、自分たちの内側のグループの意見を聞き、それを決議案にできる限り反映させようとした。何度も理念の共有を試み、「チーム」として動くという共通認識を作ることに専念した。その結果、自分たちの作った資料を、自分のグループの他の大使が使って他グループに宣伝するようになり、それが全体に浸透していった。他の国の人々が僕たち日本人の作った資料を、人種という壁を越えて共有

しているとき、「世界が繋がっている」ことを実感した。

個人的な感想だが、今まで説明したたゆまぬ努力と飽くなき探求心も、できないことをできないと諦められることも、相手の話をしっかりと聞こうとする姿勢も、日本人にしかできないことだと思う。この大会を通じて、僕は僕が日本人であることのすばらしさを実感した。圧倒的な実力によって全体をリードする西欧諸国の人とは違う、日本人が持つ人を引き付ける力を感じたのだ。「日本人では世界のリーダーにはなれない」という人がいるが、それは違う。日本人なら日本人なりに発揮できるリーダーシップがあるのだと感じた。真の意味でチームとして、人とのつながりを持って世界を調和する、そんなリーダーに日本人はなれると思う。

しかし、そんな日本人にも必要なことがある。それは、自分に対する自信とそれを表出することができる度胸だと思う。これが途中から持てたからこそ僕たちは賞をとれたのだと思うし、最初から持てなかったからこそ最優秀賞が取れなかったと思っている。この自信、度胸とは会議の中で活躍する自信や度胸とかではなく、もっと具体的に、会議の中でこれならできる、という自信と、実際にそれをやって見せる度胸だ。僕の場合はDR(決議案)の執筆と全体を見通す目であった。人は自信を持ってもいい能力を必ず持っているはずなのだが、日本人はとても謙虚なので、それを持つことや表出することができないことが多い。しかし、逆に言えば、この殻を破れば、日本人は活躍できるのだ。自分に対する自信を持って行動をしていけば、いずれ自信を持っていない分野のことも、自然とできるようになってくる。

世界は広い。そしてこの広い世界には必ずありのままの自分の努力を認め、助けてくれるようになる人がいる。そんなことを学んだ国際大会であった。自分たちが築き上げてきたアイデ

ンティティを捨て去り、新しい自分を演じる必要は全くない。だからこそ、僕は世界大会だからといって特別に自分を変えようとはしていないし、準備も基本的に今まで通りにやったつもりだ。そんなお堅い日本人でも、受け入れてくれる会議だった。ある意味運がよかったのかもしれないが、それだけではなかったと思っている。ただ、今の自分に自信をもって、ありのままの自分に少し工夫をするだけで人はついてきてくれる。だからこそ、僕は自信の持てるありのままの自分であり続けたい。そう思える全米派遣であった。

これにて僕の高校生の模擬国連は終わるわけだが、まだこれがすべての終わりではない。大学でも模擬国連はあるし、むしろ僕は今これからの人生の始まりに立ったと思っている。常に過去の自分を誇れる人生を、送っていきたい。最後に、今まで僕を支えてくださった、家族、模擬国連部の方々、先生方、グローバル・クラスルーム日本委員会に関わる全ての皆様、この派遣事業にご支援、ご協力いただいた全ての皆様に、この場を借りて御礼を申し上げたいと思います。本当に、ありがとうございました。



真坂 卓実

桐蔭学園中等教育学校 6年

中3の時に模擬国連部に入部したことをきっかけに、僕は模擬国連の活動を本格的にスタートさせた。それまでスポーツ一筋だった僕にとって、論理構築能力や、多角的視点、徹底した自己分析を必要とされる模擬国連の活動はどれもハードで、一日中走っている方が楽なのではないかと思う日が多く続いた。それでもなお、模擬国連という活動を続けられたのは、憧れの先輩のようにになりたいという思いと、ニューヨークにて開催される模擬国連国際大会に出場したいという思いがあったからだ。

「逆境を楽しむ。」

これが今回、模擬国連国際大会に臨んで学んだ最も大切なことだ。

少しさかのぼるが、11月に国連大学にて開催された全日本大会で賞をいただくことができたものの、自分が思っていた以上に悔しさが嬉しさを勝っていた。どうしても心に引っ掛かるものがあったのだ。会議行動を思い返しても、今までで一番の出来で、問題はまったく見つからなかったが、一つ致命的な事柄ができていなかった。「会議を最大限に楽しむ」ことができていなかったのだ。今まで多くの会議に参加する機会をいただいたが、全日はその中でも一位二位を争うほど楽しかった。しかしここでいう、会議を「最大限に」楽しむというのは、会議で起こるハプニングをも楽しみ、大使としてではなく、一人の人間として会議を楽しむことを指す。全日では、自分のミスが原因で思わぬハプニングを起こしてしまい、何もできない時間帯があった。その空白の時間は、ただただ落ち込むのではなく、使いようによってはもっと別の結果になったかもしれないと悔しい思いをした。

そこで、高校生として臨む最後の模擬国連会議

である、模擬国連国際大会では同じような思いをしないよう、できることは何でもする決心し、会議に臨んだ。

僕たちは、General Assembly を議場とし、Eradication of Poverty: Post 2015 Agenda (今後の貧困撲滅について) を議題とした会議にシリア大使として会議に参加した。ISIS のことでよくニュース報道されていたため、担当国を聞かされた時は驚きを隠せなかった。シリアに関するリサーチを進めると、シリアの現状として、よく貧困撲滅のキーワードとして取り上げられるインフラ整備や教育、労働の促進どころではなく、紛争が原因で援助ができない状況にあることがわかった。

今まで以上に日本的価値観を捨てようと思っていた僕たちは、どのような説明をしたら多種多様な価値観が存在する国際大会の場で、多くの人の支持を獲得することができるか悩んだ。そして、僕たちは「the Three Steps」というキャッチフレーズを思いついた。「the Three Steps」とは、紛争解決を第一ステップ、インフラ整備を第二ステップ、教育・労働の促進を第三ステップとしたものだ。議場では、「the Three Steps」の評判がよく、賛同してくれる国が多かったことや、「the Three Steps」に関して説明する際に多くの大使が集まってきてくれた時は嬉しかった。

しかし、会議では予想外のハプニングはつきものだ。多種多様な人が、価値観が存在する国際大会ではなおさらだ。前から予想はしていたものの、日本で当たり前なのがまったくと言ってもいいほど通じなかった。今回僕たちが臨んだ会議では、最初から最後まで予想外のことが起こらなかった。全日本大会と国際大会でのルールの解釈の違い、スピーチをする時間が思うようにとれなかったこと、自分のグループの案を廃案にしようとする大使がいたりなど、数えきれないほど多くの困難に直面した。

「困難を楽しめ。」

会議初日の前半が終わり、後半に向けて準備をしている際に引率して下さった橋本先生に言われた一言だ。この一言で、自分が大使としてではなく、一人の人間として当初目標としていたものを思い出した。「国際大会という場を前半、思うように楽しめなかった分、後半は精一杯楽しんでやる！」そういう思いで、会議の残りの時間を過ごすように心がけた。ハプニングがいくら起きようとも、笑顔だけは忘れまいと、無理やり頬をあげた。すると、自ずと多くの人が集まるようになり、いつの間にか人だかりの中心にいた。会議を終えると、達成感で気持ちがいっぱいになり、全日本の時に抱いていた感覚はまったくなかった。

今回の国際大会をもって、僕の高校生としての模擬国連の活動を終えることになったが、一回の会議でこんなに多くのことを思い知らされることはないほど密度の濃い時間を過ごすことができた。世界を舞台に活躍できる人間に向けて、大きな、そして確実な一步を踏み出せたと強く思う。

逆境とは、その場がいくら苦しくても思い返せばいつの間にか良き思い出に変わっているものである。今この瞬間が逆境であったとしても、その瞬間を楽しめなければ、後になって必ず後悔する。これから続く長い人生において、様々な困難、逆境に直面することになると思うが、それらに対して全力で取り組んで、全力で楽しんで、乗り越え、いい思い出をたくさん作っていきたい。

最後になりましたが、今回の派遣では本当に多くの方に支えられました。3年間指導して下さった先生方、模擬国連部の仲間、約半年間会議サポートをして下さったグローバル・クラス日本委員会の皆様に、この場をお借りして感謝の意を示したいと思います。本当にありがとうございました。



西尾 慧吾

灘高等学校 2年

2日間の会議が終わり、ポジションペーパー賞と優秀賞の発表のタイミング。賞を貰った国の名前が次々と呼ばれていく中で、Syriaの名前が呼ばれることはなかった。4ヶ月の会議準備に悔いはなかった。だからこそ名前が呼ばれなかったことが、準備を生かせなかったことが本当に悔しかった。全ての表彰が終わったとき、涙を押し殺している自分がいた。

全米大会の議場はまさに「異国」の議場だった。周りにいる高身長かつ大人びた外国人たち。アンモデ(非着席討議)が全くとられない議場(2日間で1時間もなかった)。猛スピードで繰り広げられる大使同士のディベート。各国大使による恐ろしく押しの強い政策アピール。どれもこれも日本の会議ではほとんど感じられない刺激だった。しかし、そんなことは想定していたはずだった。色々な先輩に話を聞いて、全米ではモデ(着席討議)とスピーチが中心になることや議論の展開が早いことは以前から知っていた。そして、帰国生でもなく英語が得意なわけでもない私にとって、全米の議場がとても厳しいものであることは理解していたはずだった。その上で、自分の弱みをカバーできるように誰よりも会議準備を重ねてきたつもりでもあった。

それでも私は、議場で平常心を保てなかった。

会議1日目は2回しかアンモデがとられなかった。その1回目、私の下には予想していた数より遙かに多い国々(10カ国くらい)が集まった。内心、ラッキーだと思った。グループ内で最初に政策説明をすることが出来た。会議前半で全く政策説明できなかった全日とは大違いだ。そこから各国の政策を共有しようと持ちかけると、各国大使は歓迎してくれた。だが、ここから先はうまくいかなかった。私の下に集まった国の

うち、特によくしゃべる3カ国くらいの大使が本気のディベートを始めたのだ。私はあまりの早口の英語に唖然とした。しかしよく周りを見渡すと、他のネイティブの大使達も口を挟めなくて暇そうにしている。「チャンス!」、私はそう思った。ディベートが始まることも予想の範囲内であったし、大半の大使が暇そうにしているディベートをみんなが参加できる議論に変えれば、むしろ Syria 大使の印象は上がると思ったからだ。でもこの考えは浅はかだった。私が「とりあえず全体で議論しようよ、せっかくグループなんだし」と言った途端、ディベートをしていた大使の1人が「今俺がしゃべってんねん!」と言った。その時、表には出さなかったけれど、自分の心の中で4ヶ月間積み上げてきた会議戦略とそれに対するある種の自信が崩れ落ちた気がした。

会議2日目も同じようなことが多かった。スポンサーでDR(決議案)を書き上げているとき、DRの内容を共有するとき、スポンサーを確認するとき...そのたびごとに私は今まで練習会や全日でやってきたように、全体のコンセンサスを意識してグループをまとめる発言を行った。でもその発言はなんとなく上滑りしてみんなに聞いてもらえなかった(誤解が無いように言うと、話を聞いてくれる大使も大勢にいた。ただ、彼らのほとんどが Sponsor よりも下位の Signatory になってしまっていて、DRを本格的に書く段階には私の周りにいなかったのだ)。結局、終始「頑張ってグループを仕切ろうとするけどみんなを引きつけられない英語が下手な男子高校生」程度のポジションから脱出できることなく、DRを提出した。

しかし、その後驚きの事実が知らされた。DRの受理は5個までに制限されていたらしく、私たちのDRは6番目に提出されたので受理されないのだという(途中にあった紆余曲折は省略)。

頑張って交渉するも結局DRの受理は赦してもらえず、DRの説明などの目立つタイミングもつかむことが出来なかった。そして会議が全て終わってから知った衝撃の事実 ディレクターによるDR数のカウントミス。私たちのDRは5番目だったらしい。

会議が終わってからしばらくの間は人のせいばかりにしていた。話を聞いてくれない大使のせい、周りのことを考えずにディベートをする大使のせい、アンモデを却下しまくった議長のせい、カウントミスしたディレクターのせい...でも実はそうじゃない。会議が終わってから、ずっと自分のふがいない結果について考え続けて見つけた唯一の結論は「自分の至らなさ」。周りに「話を聴こう」と思わせるような話を出来なかった。ヒートアップする大使にグループ全体で話すことの大切さを伝えられなかった。議長にアンモデの重要性を訴えられなかった。ではなぜそういう基本的なことが出来なかったのか。結局、小手先だけのテクニックだけにとらわれていて、本来「大使としてすべきこと」を見失っていたのではないかと思う。コンセンサスをとるのも、グループ全体で話をするのも、主導権をとるという模擬国ではある種会議での目標のように考えられているものでさえ、大使として国益を通すという「目的」のための「手段」でしかない。しかし会議中の私は、その「手段」を「目的」と混同してしまい、主導権をとることばかりを考え、他の大使の発言を落ち着いて聴くだけの心の余裕はなかったのだ。

ずっと心の余裕がなかったからなのか、単純にいろいろとばたばたしていたからなのか、2日間の会議はあっという間に終わってしまった。「賞は取れなかったけど全力で会議を楽しめたし、やるべきことはやりきったから悔いは無い」なんてさわやかでカッコいいことは言えない。会議中楽しいタイミングが多かったのも事

実だが、猛スピードで話し込むネイティブたちを制御しようともがき続けた辛くて苦しい時間が多かったのも事実だ。「やるべきこと」の中にも出来なかったことは多い。議場のみんなに「シリアグループ」と呼ばれるようなグループを作ってDRを出したかった。スピーチに食らいつきたかった。他の大使ともっと仲良くなりたかった。人生一度しかない会議をもっともっと楽しみたかった。そして何よりも、4ヶ月間必死で悩んだ政策を議場全体に浸透させたかった(決してカウントミスを責めているわけではなく、もっと多くの人と交渉して、議場の誰もが「Syriaの政策知ってる! あれいいよね!」と言ってもらえるようにしたかった、ということです)。会議が終わってからずっと泣きそうになっていたのも、今考えると、結局はSyriaの政策を通せなかったのが悔しかったからだろう。この報告書を書くために自分の会議を思い返してみても、「あのときこうすれば良かった」と思うことばかりだ。

全米大会では多くの後悔を残してしまったが、それでも私は模擬国連が好きだ。模擬国連を始めてから9ヶ月、模擬国連は私に本当に多くのことを教えてくれた。まずは、議題に対する知識。食糧安全保障や人道的介入なんて、模擬国連をやっていなかったら一生考えることがなかったかもしれない。次に、何かを「伝える」ということの大切さ。どうやったら自分の考えを判ってもらえるか、自分の考えに存在感を持たせられるか、悩み続けたプロセスも今の自分を作っている。そして、人としてのあり方。どうやったら相手を引きつけられるのか、相手に敵意をもたれることなく交渉出来るのか。たどり着いた結論は「ロジックよりも優しさ」だった。模擬国連で学んだことは何も会議中だけで活かされるものではない。私も高校での「もぎこっかー」生活はもうすぐ終わるけれど、模擬国以外のフィールドでも模擬国で得たことを活用して、自分の人生を切り開いていきたいと思う。

最後になりましたが、これまで私に様々なアドバイスをくれた先輩方・先生方、いつも支えてくれた家族、議題は違えど同じ国を担当し共に戦った9期派遣のみんな、夜遅くまで相談に乗って下さった理事・研究の皆さん、そして全日の時からずっと一緒に戦ってきてくれたペアの西山さん、本当にありがとうございました。私は今回の渡米の経験を、必ず活かして見せます!



西山 尚希

灘高等学校 3年

第一章「我らこそ、灘 west」

2014年8月31日、灘高校の生物教室で、私は模擬国連に出会い……それから2か月半、私は全日本大会の表彰台に立っていました。目に涙を浮かべて。

ここで私と西尾のペア（通称：灘 west）のメンバーを紹介しましょう！

まず西山は日本語ディベート出身。変人が多いとされる我らが灘高校においてはまともなほうで、灘 west のディベート&外交担当です。西尾はDR（決議案）グループの主導権をとるのに特化しています。基本西尾の手の回らないところを西山が調整する。要するに私は雑用ですね。灘 west はこの体制がベストなバランスだったのです。

全日について簡単にまとめましょう。灘 west は二人とも全日の2か月半前に模擬国連を始めました。この短期間に他の熟練モギコッカーを上回る経験を積む……そんなの不可能です！そこで私たちは完全マニュアル化で対応しました。自国にとって嫌な政策への反論集。灘 west の政策、NADA (New Agricultural Development Assistance) への反論を予想したディフェンス集。DRグループでリーダーシップをとるための必勝法、そして会議に対するイデオロギー（やさしさ原理主義）を灘 west で考察&作成&共有しました。こうして灘 west は優秀賞をとったのです！

第二章「灘 west は準備する」

灘 west は全日と同じくマニュアル至上主義で全米に臨みました。担当国はシリア、議題は Humanitarian Intervention Responsibility to Protect。準備に手抜かりはなかったと思います。我らが **بشار حافظ الأسد**（アサド）大統領のご見

解をすべて頭に叩き込み、西尾とともに全日本大会と同様の準備を英語で Google Drive につくりこみました。この準備が全く役に立たなかったとは言いません。しかし、後述するように会議ではあまりうまくいきませんでした。

もちろんこれだけが灘 west の準備ではありません。どうすれば両者とも non- 帰国子女な灘 west が英語で他国大使と打ち解けられるのか、じっくり考えました。なんせ気の利いたジョークを言うのも英語だと一苦労です。灘 west なりに工夫しました。M&M's World という店でかわいらしいネクタイをお揃いで買ったり、4歳児向けのかわいらしいスケッチブックに政策を書き込んだり。こういう努力は議場で些細ながらも効果を発揮しました。「そのスケッチブック最高(笑)」「そのネクタイ俺も欲しい！」みたいに周りの席の大使から声をかけてもらったのです。そのまま仲良くなり、シグナトリーになってくれたり積極的に協力してくれたり、そして何より灘 west と一緒に会議を楽しむ仲間となりました。

第三章「灘 west は NY へ」

渡米後、例年通りいくつかのプログラムをこなしてから会議に臨む予定でした。しかし残念ながら今年はそのうちのほとんどがキャンセルになってしまったのです……。まず、バディースクールとの交流は相手側のご都合で自由の女神ツアーに変更。とはいえ初見の自由の女神は迫力あって楽しめました！日本政府代表部とシリア政府代表部は相手側が忙しすぎて難しいとのこと。しかしめっちゃくちゃお忙しいであろう UNDP の中満様からお時間をいただけることに！「めっちゃくちゃ」というのも、私たちがお会いする直前の午前中だけで世界を動かすような会議を6個もこなしてらっしゃったという……派遣生一同唖然です。

中満様からは派遣団に、貧困問題からシリア

の内戦状況、そして今日の国際社会の潮流について、まさしく国際社会の最前線を肌で感じられるような、迫力のあるお話をしていただきました。おそらく次の派遣団も受け入れてくださると思うので、来年度派遣生には、聞きたいことをみゃーって聞きまくることをお勧めします。本当に素晴らしいお方なので。

第四章「灘 west は議場に戸惑う」

まず、灘 west が参加した会議の特徴としては、次のような感じでした。 Formal Debate が永遠と続く。2日間合計して100以上スピーチが行われました。嘘も誇張ありません。100以上です。アンモデ（非着席討議）が異様に少ない。2日間あわせて40分ほどでした。戸惑いましたね。というのも、Motionでアンモデを提案しても「今はスピーチ聞きたい！あとでアンモデにしよう！」と議長裁量が入るのです。しかしこれも一つの会議のあり方。私たちの想定が甘かったということでしょう。

会議が始まって真っ先に驚いたのは、Formal Debateで1番をとれたことです。つまり会議が始まってすぐに、どの大使よりも先にスピーチをするという幸運にめぐまれ、壇上へ。

بشار الأسد (アサド) 大統領は国民から支持されているのだ！という、少々過激な内容の90秒のスピーチを終えて席に戻ると、「いいスピーチだったよ！」「君みたいな大使と会議が始まる前に会話できてよかった！」などとメモがいくつも送られてきたのです。うれしいというよりも驚きましたね。この事例からもわかることなのですが、参加者は自国を背負う大使というよりは一人の高校生として、「模擬」国連という場をエンジョイしているのです。全日本大会の参加者が自国の利益を考え、大使として行動することをエンジョイしていたのとは対照的です。

少ないアンモデでしたが、まずペルー、南スーダンと組みました。その後北朝鮮たち3国とくっ

つき、DRが形を成してきました。しかしここで、灘 west が「ディレクターの罨」と呼ぶ悲劇が起こります。

どうやらDR作成段階で6個グループがあったらしく、かつフロントは5つまでしかDRを受理しないつもりだとか。私たちのグループとイスラエルのグループとをくっつけるようにDirectorから指示があり、がんばって1つにしました。これでDRグループは5個のはず。しかしDR提出後、しばらくするとディレクターがシリアの席に来て、「なぜかDR6個あったわ。アフガニスタンのところとくっつけて」と。アンモデ外でコンバイン（文書の統合）交渉とか無理だろうと思いつつもメモで必死に交渉。するとまたディレクターが現れ、「さすがに無理だろうから今回は6個受け取ることにしたわ。この紙にDR書き写して」と。超高速で写経しているとディレクターが現れ「時間切れ、ごめんねー」と。「全米はなんでもあり得る。」誰の言葉だったかは覚えていませんが、まさにこの通りです。逆に言うと、なんでもあり得るからこそ万全の想定&対策が必要なのでしょうか。

最終章「そして灘 west は振り返る」

この会議をもって灘 west は解散しました。たった9ヵ月弱、しかし灘 west が模擬国連から得たものはかけがえのないものです。それは賞をとれなくても変わりません。模擬国連を通じて、西山の第一印象は180度変わったとまではいきませんが、フレンドリーな印象を与えられるぐらいに、40度ほどは修正されたはず。西山の調べものの力は60%増しぐらいにはなったはず。そして何より、西山の交友関係の幅は1.5倍ぐらいにはなったはず。

模擬国連は西山の高校生活を、想像していたよりもはるかに華やかな色合いに仕上げてくださいました。

「次の色を探しにゆこう。」



佐伯 壮一朗

六甲高等学校 3年

私たちが高校へと進学した2年前、六甲高校には模擬国連の「も」の字もありませんでした。そのため、模擬国連に関するノウハウから大会への参加の方法まで、私たちは自分たちで、すべて切り開いてきました。何も知らなかったあのときに比べれば、よくここまで来られたものだとも思います。

2回の全日本大会を経て、たどり着いた国際大会。チーム六甲に与えられた議題は、エネルギーの持続可能性に関する“Sustainable Energy for All (SE4ALL)”でした。エネルギーを考える際には気候変動や経済、そして開発の問題などを総合的に鑑みなければいけないため、思っていたよりも非常に幅広い議題でした。そのような会議で私たちの事前準備が評価される形となり、Best Position Paper 賞を頂けたことを非常に光栄に思っています。

以下、この大会を通じた考察や思いを字数が許す限り述べていきます。

シリア

私たち9期に与えられた担当国はなんと、シリアでした。そう、“あの”シリア。国内情勢の悪化に伴い、国際的なイメージは最悪といっても過言ではありませんでした。それは、私が初めに持っていた印象となんら変わりませんでした。しかし、Support Paper などを通じてシリアの Background を調べていくうちに、シリアという国の「本質」が徐々に見えてきて、この国の大使という役割を全うすることへの使命感と責任を感じたのを覚えています。しかし、何といっても担当国は、“あの”シリア。どんな方面から非難を浴びるかわかりません。そのため、私個人は9期の全6チームの Support Paper、Position Paper を仕入れ、国の代表としてほぼ全

ての方面の知識を持つことを意識しました。

会議準備

全日では国割表がすぐに配られたため、自国のリサーチに加え、どの国の大使になったとしても動けるレベルまでリサーチを積んで会議に挑みました。しかし、世界大会では国割表の更新が遅く、結果的に自国及び世界全体のトレンドを汲むリサーチが中心になりました。さらに、広い会議場の中で埋もれないように全力で目立つことを意識し、視覚要素に訴えかけるような準備に力を注ぎました。壁をホワイトボードに変えるフィルムシート、ラミネート加工された交渉ペーパー、自前の Syria のプラカード...すべては、目立つために用意したものでした。

会議

・見られているのは...

シリアは国際情勢上、孤立した国でした。そんな状況で、この世界大会の会議においても孤立を招くのではないかと思い、心配していました。しかしそんな不安とは裏腹に、議場の大使たちは、私たちを快く受け入れ、政策を認めてくれました。自分たちは、その国の代表として会議に参加しているけれども、その議場にいるのは私たち自身。最後まで信じられるのは自分たちだけ。そして、最後まで自分を信じられるのも自分だけなのです。

・「待つ」ことと「耐える」こと

「待つ」ことと「耐える」ことは違います。どんな状況でも、辛い時は必ず来ます。必ず。その中で状況が変わるのを、ただ待つのか。はたまた、そんな中でも全力で最善を尽くして、状況を耐えぬくのか。実際は、どちらも難しいことです。しかし、私たち大使に求められているのは耐えることだと思います。耐えたからといって、状況が変わるという確証はない。しかし国の代表を担うものとしては、絶対に、逃げてはならない。たとえどんなに辛くとも。

・「伝える」こと

英語が母国語ではない私たちにとって、言語の壁はとても大きいものです。議題が複雑であれば、特にそう感じるでしょう。しかし、自国の主張をやめてはいけない、やめられないのです。その時のための準備をしておくのは当然のこととして、大切なのは、それでも対応できなかった時。そうなってしまったときには、どれだけ「伝えよう」と思えるかが重要だと感じました。驚くことに、全力で「伝えよう」とすれば、意外と相手に伝わるものなのです。特に、スピーチは世界大会ではかなり重視されます。私自身、数少ないスピーチの中で運よく「会議を動かせた」経験をさせていただきましたが、臆せずプラカードをあげて発言していくことは、とても重要だと感じました。

・俯瞰する

世界大会の議場は、日本に比べると非常に大きいです。その議場全体を如何にしてペアで把握できるかは、非常に重要なポイントだと思います。各グループ（フロント含む）の大まかな構成、主張や状況を、すべてを握っておけば会議を楽に進めることができるのではないのでしょうか。言うのは簡単でも、実行はかなり難しいと思いますが...。これを1つの目標にしてみてもいいのではないかと感じました。

・失敗せよ

誤解を招かぬように初めに書いておくと、失敗を画策しろというわけでは勿論ありません。ただ、失敗を恐れてチャレンジしないということだけは絶対にやめてほしいのです。私たちはあくまでも国連を模擬して行っているだけで、本物の国連ではありません。ミスをして、どうとでも取り返しはつきます。私も全日本大会、世界大会ともに大きなミスをしてしまいました。しかし、あのミスが私を大きく変えてくれたと今は思うことができます。寧ろ、あの時にあの

選択をしなかったら、私はさらに後悔していたでしょう。行動しなくて後悔するよりも、行動して後悔する方が絶対にいいと思います。自分で、やりきったと言えるから。私たちは、チャンスをもっているのです。それを最大限活用する義務と責任が、私たちにはあるのではないのでしょうか。ミスをして、取り返せばいいのです。

最後に

・粘り強く

世界大会は、途轍もなく大きく、長い闘いです。投げ出したくなることや、落ち込むこともあるでしょう。実際、私も準備段階で大変な時期を迎えたりもしました。会議中やモデ(着席討議)、Motion採択時には常にプラカードをあげていましたが、Syriaが発言権を得た機会は、2日間を通じて片手で数えられる回数ぐらいしかありませんでした。特に、会議2日目のお昼休みにDR(決議案)の提出を拒否された私は、模擬国連を始めて以来、初めて退出の可能性を本気で考えました。しかし、その後の4th Sessionに出て、最後まで全力を尽くしたことは今では自信となり、私の中に強く残っています。

4th Sessionのあの辛い状況の中で、私を最後まで頑張らせてくれたのは、多くの皆さんからの支えがあったからにほかなりません。家族や友人、先生は勿論、全日本大会に共に出場し、大会後も会議準備の手伝いや応援してくれた仲間たち。そして、難しい議題の中で英語を強要して練習会議につきあってくれた後輩たち。ありがとうございます。みんな本当に大好きです。そして、大会まで私たちを支えてくださったJCGC研究、理事及びに関係者の皆様、本当にありがとうございました。後輩の皆さん、模擬国連全体について、全日、そして世界大会について何か聞きたいことがあれば、是非遠慮なくご連絡ください！全力で応援したいと思っています。



東 由哲

六甲高等学校 3年

2013年11月、全日本大会。2日間の会議で活躍する大使たちを目前にして、数値化できないだろう「賢さ」を漠然と、でも確かに感じとった。そして、その「賢さ」を持つ大使に魅了され憧れ続けてきた。しかし、全日本大会が終わり、その後他校での練習会議、2回目の全日本大会への参加を通して、論理力や交渉力などではない、このなんとなくはっきりとしない「賢さ」が何であるかは分からなかったが、高校生として最後の会議、今回の国際大会への派遣ですべて自分の中であり続けた疑問に自分なりの答えを見つけることができた。僕が模擬国連で感じた周りの「賢さ」とは何だったのか？

国際大会。僕にとっては始まる前から挑戦の連続だった。

まずは英語。果たして中学から英語を勉強し始めた自分の英語力が通用するのか？

次に与えられた国。なぜシリアという世界で最も複雑な情勢の国なのか？

そして、会議の進行方法。日本のルールとは異なる方法で進められる会議に苦しめられないか？

逆境や運さえも凌駕する実力 例えば英語という言語の壁。例えば議長など会議進行側との相性。例えば与えられた国 言い換えると、自分に与えられた条件が有利だろうが不利だろうが、そのこと自体、あるいはそれ以前についてのことを「こうすればよかった」と後悔をするのではなく、想定外の事態を物ともせず真正面から乗り越える力。その力こそが、模擬国連で問われる主な力の一つであって、僕が感じた「賢さ」の正体だ。そして、この力を持つということは人として大きく成長した証であって、それゆえ僕にはその力をもつ人たちに凄さを感じ、

憧れたのだ。残念ながら、僕にはその力がまだまだ不足していた。英語という壁の前で、納得できるまで交渉できなかったこと。会議進行側との相性の悪さに上手く対応できなかったこと。しかし、今回の国際大会で逆境に怖気づかずに挑戦できたことで、明確に何が足りないのか気づけたということは、将来自分が目指すべき人間にとっても大きな影響を持つものだと思う。

そして、最後の会議に臨む前、僕の頭の中にはもう一つの問いが浮かび上がっていた。

「僕にとって模擬国連とは何なのか？」

高校模擬国連を終えた今、僕にとっての模擬国連とは何だったのだろうか？

僕が模擬国連から学んだことはたくさんあるが、その中で特筆すべきなのは「人との接し方」だ。初めて顔をあわせる人たちと、それぞれが守りたい国益を持って、議論する。そのような場で、自分たちの国益を達成するには、どんな政策を持っているか以上に、他の大使との接し方が大事だ。いくら自分たちが100%国益を達成できる政策を持っていても、それが相手に理解されず、決議に含められ可決されなければ、国益は達成されない。

自分たちの政策を相手に理解してもらい、それを決議に載せ、そしてその決議に対して相手に賛同してもらおう。そのような目的で他の大使と接する際に必要なのが、「聞く力」と「伝える力」、まさしく「コミュニケーション能力」だ。国益を達成するべくして、自分たちの政策について周りに伝えたいのは、議場にいるすべての大使が思っていること。その他の大使の話も、「聞く力」。相手の話そうとしている真意を短時間で汲み取り、丁寧に意見する。いくら相手に自分と対立する点があろうと、話を最後まで聞かずに自分の意見を言ってしまえば、自分たちは良くて、相手の印象は悪くなる。また、相手をその場で論破しても良いわけではない。よく模擬国連はディベートに似たものという意見を聞

くが、僕は違うと思う。相手を1度論破してしまえば、相手の印象が悪くなるだけでなく、会議でのその大使との関係は終わりだ。相手国の政策のどの点が自分たちと相容れないかを的確に判断し、それをもとに相手に働きかけ、win-winの関係を築く力。

そして、自分の中の考え、リサーチで積み上げた政策や方向性を、相手に「伝える力」。相手が真意をつかみ、そして頭の中に残って初めて、自分たちの考えが議場に存在するようになる。国益を達成するために、議場で正しく自分たちの政策の存在感を発揮させる力。

模擬国連の会議に参加する中で、この二つの力が、何度も必要だと感じ、最も学んだことだ。

ここまで長くなってしまったが、これらの「聞く力」、「伝える力」、そして「逆境を乗り越える力」というのは、模擬国連の場だけでなく、これから僕たちが社会に出ていく際に必要な力ではないだろうか。不利な条件の下で勝負しなければならないことや、理不尽なことにぶつかることもあるはずだ。そのような事態にどう対処するか。

ある留学雑誌で見つけた「模擬国連」という四文字。その言葉から、僕は模擬国連に興味をもち、そしてその面白さに惹かれ、その過程で心から尊敬できる友達ができ、彼らの姿を目前にして成長させてもらった。「自分の目指す大人とはどんな存在なのか」。模擬国連は、その答えを僕の中にはっきりと作りあげてくれた。

最後になりますが、今まで僕の模擬国連にかかわって下さったすべての方々。高1から相方を引き受けてくれた佐伯、目の前で目標となる姿を見せて下さった先輩方、派遣生を始めとした模擬国連で出会った友達、いつでも応援してくれた家族、どんな時も力になってくださった吉村先生、今回の派遣事業に関わって下さったグローバルクラスルーム日本委員会、ユネスコ・

アジア文化センター、UNDP 危機管理局の方々を始めとした皆様 に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。



■ 支援者・支援団体一覧

本大会の実施にあたり、多くの方々から温かいご支援を賜りました。ここに厚くお礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させていただきます（敬称略）。

【後援】

外務省 経済産業省 文部科学省 公益財団法人日本国際連合協会 国際連合広報センター

【協賛】

株式会社エヌエフ回路設計ブロック	株式会社ナガセ
学校法人 河合塾	株式会社日能研
キッコーマン株式会社	株式会社ニチレイ
株式会社公文教育研究会	日本光電工業株式会社
TOEFL Junior® (GC&T)	株式会社 By-Q ホールディングス
株式会社講談社	海外トップ大進学塾 Route H
株式会社ジェイティービー	（ベネッセコーポレーション）
学校法人 駿河台学園	株式会社みずほ銀行
損害保険ジャパン日本興亜株式会社	株式会社三井住友銀行
ちきゅうくらぶ	三井物産株式会社
学校法人 高宮学園 代々木ゼミナール	三菱商事株式会社
一般財団法人 凸版印刷三幸会	株式会社三菱東京 UFJ 銀行
トヨタ自動車株式会社	

（五十音順）

【協力】

株式会社日本経済新聞社
日本航空株式会社
株式会社読売新聞グループ本社
株式会社リクルートマーケティングパートナーズ
理想科学工業株式会社

■ ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) からのメッセージ

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) は、グローバル・クラスルーム日本委員会とともに高校模擬国連事業を共催し、日本代表団派遣支援事業を推進しております。「次世代の国際人 / グローバルな人材を育成する」という趣旨にご理解・ご賛同をいただき、ご協賛・ご協力をいただいた企業様・団体様に改めて深く御礼申し上げます。

昨年 11 月に開催された第 8 回全日本高校模擬国連大会で優秀な成績を収め、第 9 期のグローバル・クラスルーム高校模擬国連国際大会派遣団に選出された皆さんの国際大会における堂々とした英語での主張、交渉能力は日本代表として立派なものでした。シリア大使を担当するということでリサーチや準備も大変だったということは想像に難くありませんが、その中であって派遣生全員が堂々と会議に臨み、優秀賞・ベスト・ポジションペーパー賞に輝いたことは私どもの大きな喜びでもあります。

派遣生の皆さんは、代表団に選出されてから長い時間をかけて、周囲のサポートのもと会議の準備をしてきたことと思います。現地でも時間を惜しんでリサーチをする姿が見られました。そこにはいつも、多くのの方々の支えがあったことと思います。会議の本番中にも、休み時間にも、全力で派遣生のサポートをしていた先生方や JCGC メンバーは派遣生の皆さんにとって、何よりも心強かったのではないのでしょうか。皆さんが今回の経験を通して得たものは、是非後輩たちに伝えてほしいと思います。

今回の国際大会で得た経験や努力が、皆さんの将来のキャリア創造に役立ち、次世代の

国際人 / グローバルな人材に成るための一助になるなら、ACCU としてもこれ以上の喜びはありません。

最後になりますが、国際大会派遣にご尽力いただいた関係各位の皆様には心より御礼申し上げます。今後もますます派遣事業が発展して行きますよう、ACCU としても精一杯努めてまいります。今後ともご支援・ご協力を宜しくお願いいたします。

ユネスコ・アジア文化センター (ACCU : Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO) について

ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) は、ユネスコ (UNESCO、国際連合教育科学文化機関) から「アジア太平洋地域での文化の相互交流を促進する中核的センター」の設置を打診されたことを契機に、1971 年に日本政府と出版界を中心とした民間の協力によって設立されました。設立以来、ユネスコのうたう「平和は、人類の英知と精神的な連帯のうえに築かれるものである」という精神のもとに、日本を拠点にアジア太平洋地区諸国の教育と文化の分野でユネスコや各国関係団体と協力して、人材の育成と相互交流を促進する事業を行なっています。

2011 年 11 月からは「公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター」として、これまでに以上に関係機関と連携して地域の現状と社会の要望に即した事業を展開しています。

■ グローバル・クラスルーム日本委員会（2015年6月現在）

（敬称略、順不同）

【アドバイザー・ボード】

明石 康
（元国連事務次長 / 公益財団法人国際文化会館理事長）

【評議会】

星野 俊也（議長）
（日本模擬国連 OB / 大阪大学副学長 /
元国連日本政府代表部公使参事官）

中満 泉
（日本模擬国連 OG / 国連事務次長補及び国連開発
計画総裁補兼危機対応局局长）

紀谷 昌彦
（日本模擬国連 OB / 駐南スーダン大使）

柿岡 俊一
（埼玉県立浦和西高等学校教諭）

竹林 和彦
（早稲田実業学校教諭）

米山 宏
（公文学園 SGH 担当教諭）

青柳 沙耶
（東京外国語大学英語科 3年 /
2015年度理事長）

大内 朋哉
（東京大学法学部 3年 /
2015年度研究主任）

光本 愛理
（2012年度国際大会派遣生 /
慶應義塾大学法学部 3年）

西田 裕信
（2013年度国際大会派遣生 /
東京大学教養学部 2年）

安田 侑加
（2014年度国際大会派遣生 / 聖心女子大学 1年）

【理事会】

青柳 沙耶（理事長）
（東京外国語大学英語科 3年）

大内 朋哉（研究主任）
（東京大学法学部 3年）

馬欠場 直人
（慶應義塾大学経済学部 2年）

神保 真宏
（東京大学教養学部 2年）

齋藤 優香子
（慶應義塾大学法学部 2年）

立花 裕太郎（2014年度理事長）
（慶應義塾大学法学部 4年）

松野 雅人（2014年度研究）
（東京大学教養学部 4年）

逢坂 瞳（2014年度副理事）
（聖心女子大学歴史社会学科国際交流専攻 4年）

■ おわりに

今年度の高校生模擬国連国際大会の第9回日本代表団派遣事業がおわり、ついに、ニューヨークの国際大会に派遣した高校生が100名を超えました。いよいよ来年は記念すべき10回目の派遣になります。この冊子が発行される6月中旬には、10回目の派遣事業を前に、派遣生OBOGが集まり10周年プレイベントを開催するそうです。初期の派遣生のOBOGはすでに大学や大学院を出て社会で活躍しています。海外での医療活動を前提にした医者、国際弁護士、海外のシンクタンク、証券会社、商社、文部科学省、銀行など進路はさまざまですが、10周年プレイベントには7割近いOBOGが集う予定だと聞いています。

さて、彼らの中には、高校模擬国連活動で夢を持ち、現在の進路につなげた生徒もいます。模擬国連会議で培われたスキルを活かした仕事についている生徒もいます。模擬国連活動で輪が広がった仲間たちと一緒に新しい取り組みを始めた生徒もいます。そして、なにより大学生になって、私たちが行っているグローバル・クラスルーム日本委員会の活動と一緒に取り組み、高校生の全日本大会を運営し、このニューヨークへの派遣事業を行っているOBOGがいます。

私たちグローバル・クラスルーム日本委員会は、今回の日本代表団として模擬国連国際大会に参加した若い「大使」たちも、ニューヨークにおいて本物の国連を間近に実感しながら、教科書では学ぶことのできない多くのことを体験し、これからの学びと研鑽の糧を得て帰国してくれたと確信しています。彼らの今後の活躍を楽しみにしています。

数多くの支援協力団体のご支援により、ACCU（ユネスコ・アジア文化センター）と共に実施している高校生模擬国連国際大会の第9回日本代表団派遣事業も、この報告書発行と報告会を持ち、おかげさまで無事に終了できます。今回も代表団にご参加くださった各派遣校の教員の皆様、保護者の皆様のご理解には厚く感謝申し上げます。そしてニューヨークの国連本部のGA Hallで始まった開会式から閉会式まで、派遣生自身がそれぞれ責任ある姿勢と誇りを胸に、素晴らしい「大使」の役割を果たし、大きな成果を上げ、素晴らしい体験をしてきたことを、今回の日本代表団団長を務めた私はもちろん、評議員一同誇らしく感じています。

また、毎回の派遣事業には大学生の全国組織である日本模擬国連によるサポートが不可欠です。今回の派遣でも、昨年の全国大会での派遣生の選抜に始まり、国際大会参加への高校生が行う準備のサポートや引率など、代表団派遣のために数多くのことに、理事長以下多くの大学生が誠実に取り組んでくださったことに改めて厚くお礼を申し上げます。さらに本事業に対し、ご支援いただいています協賛・後援諸団体には感謝の言葉もございません。私たちは、多くの皆様のご支援とご期待を励みとし、グローバル・クラスルーム事業のさらなる発展に一層の努力をしていく所存です。どうぞ今後ともご指導・ご支援のほど、よろしく願い申し上げます。

グローバル・クラスルーム日本委員会 評議員、
第9回日本代表団派遣事業 団長 竹林 和彦

■ 関連リンク

グローバル・クラスルーム日本委員会 / Japan Committee for Global Classrooms	http://www.jcgc.accu.or.jp
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	http://www.accu.or.jp
米国国連協会 / United Nations Association of the United States of America	http://www.unausa.org/
全国英語教育研究団体連合会 / The National Federation of the Prefectural english Teacher's Organizations	http://www.zen-ei-ren.com/
外務省 いっしょに国連 / "Together for the UN" Outreach Campaign	http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/together-un/
【お問い合わせ】 グローバル・クラスルーム日本委員会	gc@jmun.org

MEMO

MEMO



編集・発行 Japan Committee for Global Classrooms
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

発行年月日：平成 27 年 6 月